

生きるとは一体。

ホットケーキで殺人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自我を得た人造人間が頑張るっていう実に有り触れたハートフルなお話。

8 7 6 5 4 3 2 1

--	--	--	--	--	--	--	--

137 113 95 74 45 27 13 1

目次

つい先日、とある離島で違法な研究所が見つかったらしい。

非常に攻撃性が高い致死性の毒ガスが充満していて、探索チームや研究員はもちろん、実験に使われたと思われる少年少女も皆死んでいるとのこと。

酷い話だ。

「鬼道！ 集中しろ！」

思春期なのだろうか。

妙に荒れてる千冬さんに注意されて、子供用の竹刀を振る。

——なんて不毛なことなんだ。

堅苦しい型もそうだが、特に精神論がいけない。

竹刀だろうが鉄パイプだろうが人が持つて振れば暴力だし、

そこに正しい、正しくないだとか、理性、倫理の類を持ち込んだところで本質は変わらない。

大切なのは損得勘定と自己満足のバランスだ。

合理性とも言う。

そんなことを考えていると右腕に不調が！

ラッキー、これで道場を辞める理由が出来た。

元々一般人っぽいという理由で通い始めたからな。

長居をする気はない。

という訳で道場主の柳韻さんに辞めますと伝える。

無言で頷かれ、病院へ。

あつれー？

診察の結果、歪みがどうかであと数年もすれば右腕が完全に動かなくなるらしい。

まあ母体の中で過ごすはずだった十ヶ月をすっ飛ばして作られたので、異常があつて

当たり前なんだが。

新シリーズと違って、テロメアが割とヤバイ状態だからな。

これからも右手に限らず、生体組織が少しずつ劣化していくだろう。

さて、治療するとなれば数百万掛かる。

柳韻さんが借金しかねない顔をしていたので、借金した場合の家族の将来を語ること

で思い止まらせる。

それに生体組織がダメというなら、機械化すればいい話だ。

「機械化？」

「ええ、機械化です。機械の腕、夢が有るでしょう?」

「……」

まあ肉体派の大人には理解出来ないか。

帰宅後、俺のクローンを解凍して体温を39。に設定し、寝かせる。

書類上は両親ということになっているNo. 18とNo. 7に面倒見るように命令してアリバイ作りは完了だ。

地下室のラボにて作業開始。

三日——で出来るといいな。

◇◇◇◇

「君、面白いことしてるね」

作業中に声を掛けられ、モニターを確認するとデフォルメされた兎が画面に写っていた。

別のモニターで一階の様子を確認すると、No. 18とNo. 7が新しい布団を用意して俺のクローンと仲良く寝ている。

使えないな。

それでこの女性は確か——篠ノ之束さんだったか。

たまに道場の近くで千冬さんや箒とワチャワチャしているのを見たことがある。

親からこの人に伝わってしまっただのだろうか。

とりあえず眠気覚ましに常備してある珈琲でも出すとしよう。

「ミルク入れます?」

「東さんはブラックをご所望だよ!」

そう返す東さんは興味深そうにモニターを見つめている。

「ふふん、(ニ)をこうして——」

どういふ気まぐれなのか、手伝ってくれるらしい。

作業ついでに幾つかのデータが盗まれているようだが、止められるようなものじゃない。

以前チラツと彼女のラボ——倉を改造したのを見たが、あれば数世代進んだ技術だ。

数十万という検証のよって得られる一つの成果を、何千何万と束ねてようやく理論上は可能とされるような技術が幾つ也使われている。

俺自身、研究所のデータを脳にインストールしていなければ、理解のりの字も出て来なかっただろう。

東さんの手助けもあって、腕の形成、神経系との接続、修復機能などの設計図が完成。これをナノマシン生成カプセルに読み込ませる。

俺の生体情報を基に、数日すれば新しい右腕が出来ているだろう。御礼に何か欲しいものはあるか、と東さんに聞いてみる。

「もうデータ貰ったから大丈夫！　これでISの自己再生機能が完璧になったよ！」

ISとは何か聞いてみると、それはもう上機嫌に語ってくれた。

インフィニット・ストラトス、宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツらしい。

もう本体は論文としては完成しており、

自己再生機能を仕上げればどこに出しても恥ずかしくないとか。

ここに来たのは、父から俺の話聞き、これまでの息抜きも兼ねて遊びに来たのと。と。

「ふふふ、これを応用すれば生体維持機能も向上する……今日は徹夜だぜい！」

上機嫌なのか、それとも寝不足なのか分からないテンションだな。

せっかくなので、即興で作った兎の絵を彫り込んだマグカップをプレゼントだ。

日用品ぐらいならナノマシンと設計図さえあれば簡単に作れる。

ナノマシン自体も割と簡単に培養出来るしな。

日本には潰れても問題無いような工場が沢山ある。

「ありがとう少年！　いやゆるくん！　暇になったらまたお邪魔するよ！」

そういつて束さんは風のように去っていった。

有機というのは自分で付けた名前だが、それを略して愛称にしたのか。

No. 2と呼ばれるより嬉しいが——彼女がそれに気がついた時、どうなるものやら。

まあたつた一度の会話で身内扱いはされまい。

そう思うと寂しいものだ。

◇◇◇◇

新しい腕はよく馴染む。

血が通うようになっているので、外皮が自然な肌色になる。

とある細胞が骨を溶かし、とある細胞が骨を作ることで代謝を行うように、

この腕もナノマシンが骨格や外皮を溶かし、ナノマシンが骨格や外皮を作る。

人工筋肉や健の部分なんかも同様だ。

血流に乗って全身を循環するナノマシンと同期して、成長に合わせてこの偽りの腕も成長する。

自己修復機能なんてものは、同期システムの副産物に過ぎない。

問題があるとすれば、仕込んだギミックがブレードなだけってところか。

展開時に外皮に穴が空くのが欠点だが、まあ仕方無い。

それと燃費だ。

いつもの三割増しぐらいは食べないと右腕が動かなくなるだろう。やべえな剣道なんかやつてる場合じゃねえ。

そんな感じで腕は治ったけど普通じゃないから道場は辞めるぜ☆
つて感じに柳韻さんに伝えると、何故か竹刀を渡され、打ち合うことに。

付き合う義理などない。

竹刀を名も知らぬ門下生へ渡し、道場を去ろうとするが、千冬さんと箒が腕を組んだ姿勢で入り口へ立ち塞がる。

おつかないので回れ右して、普通に窓を開けてそこから外に出る。

これが俺の逃走経路だ。

歩いていると、何やら憤慨する束さんが見えた。

どしたのー？

「インフィニット・ストラトスを欠陥品だつて？ ふざけるな！

私の夢なんだ、必ず認めさせてやる！」

それは素晴らしいな。

でも胸倉掴むのはやめて欲しい。

足付いていないし締まる締まる。

「ごめんゆうくん、でも今は凄くイライラしてるから……またね」

そういつて、ラボへ走っていった。

ISが話し通りの代物なら、欠陥品どころかオーバーテクノロジーだ。

まあ宇宙用のスーツなのに宇宙用の母船がないのはどうかと思うが。

それにしたつてこれを認めないとは、見る目がないな。

いや、怖いだけか。

◇◇◇◇

突然昼ドラが緊急生放送へと変わった。

いろんな国のミサイルが日本の国会目掛けて迫っているらしい。

ここは国会じゃないし問題ないな。

とか思つてると全てのチャンネルが国会上空の映像に代わり、人型の何かが浮かんで
いる。

これは東さんの言つていたISか。

見た目は完全に騎士、白いから白騎士か。

翼があるので、エンジェルナイトでもいいかも知れん。

搭乗者は誰にしたのだろうか……まあ東さんの知り合いなら千冬さんだろうな。

大穴で本人つてとこだ。

白騎士はミサイルを切り払い、その後によつてきた戦闘機をも切り落としていく。素晴らしいな、ダイナミックプレゼンテーションだ。

爆風の中を突つ切つて大気圏を突破し、宇宙衛星を真つ二つに……ああ、そういうことはしないの。

つまらんな。

宇宙スーツなんだから宇宙に行くのが一番だと思つたが。

既存兵器に支えられた各国の軍事的な面子を潰したつて意味の方が大きそうだな。

あ、でもミサイルや戦闘機の破片が降り注ぐことによつて生じる人的被害を思えば、遠回しにお前らのせいだと嘲笑つているのかも知れない。

ISを認めていれば悲劇は起こらなかつたのだぞ、という感じかな。

まあ人間なんて沢山いるし、二桁程度の悲劇なんて他国の交通事故と同じぐらいどうでもいいことだ。

なんにせよ、これだけやればISは世界中に認められるだろう。

どう扱われるかは知らんが。

◇◇◇◇

脅しに近い形だが、白騎士事件を境にISは世界中に認められることとなつた。

各国にてコアの研究が行われ、現状では女性しか乗れないらしい。

理性より感情を優先しがちな女性に科学の最先端を預けるとは、嫌な予感しかしない。

まあ女性専用だというなら必要以上に関わる必要もない。

自分の研究を進めるだけだ。

圧力が加われれば加わるほど硬度、弾性が強まる特殊な合金と七連装式レーザー砲。

この二つを組み合わせて作った車両でマントルへ冒険しに行くのだ。

未発見の空洞や資源発掘、仮想敵国の地盤粉碎と、実に夢がある。

問題は動力だ。

核が現状一番出力が出るが、抽出と管理が面倒だ。

人間をナノマシンで分解する際に結構なエネルギーが得られるので、

何百人かで実験して人間を小さな固形燃料へと加工して電池、または炉に近いものを作るでしょう。

研究所の論文に似たようなものがあつたはずだ。

確か賢者の石だったか。

◇◇◇◇

No. 18とNo. 7を連れて役所での手続きや役人の洗脳を終えて帰宅すると、束さんが地下のラボにて珈琲を飲んでいた。

マグカップを愛用してくれているようで、ありがたいものだ。

とりあえずいつ宇宙に行くのかを聞いてみるが、どうにも機嫌を損ねたようだ。

「あいつら酷いんだよ、ISを兵器としか思っていない。」

ちーちゃんも欠陥品とか言つて宇宙まで来てくれないし！」

随分とフラストレーションが溜まっているようだ。

まあ聞くだけなら苦ではない、癒される声をしているしな。

車両の設計シミュレーションをパソコンに任せて、束さんに向き直る。

ある程度愚痴を吐き出したおかげか、スッキリしたように見える。

「ところでゆーくん、また何か作ってるみたいだけどそれ何？」

意地の悪い人だ。

見た時点でそれが何かもう分かっているだろうに。

そういう思いを顔に出すと、束さんはにぱーと笑みを深めた。

「男の子なら空の方が好きだと思つてたけど、ゆーくんみたいなのもいるんだね」

「まあ私念もありますかね」

地下に用意された研究所を真横から消し飛ばすのを想像すると中々面白い。

「クッククック」

「あ、ゆーくん楽しそう！ 束さんもこうしては居られない！ ラボの制作を急がねば

！
┌

あのラボ以上のものをどうやって作るのだろうか。

というか東さん、学校はいいんだらうか。

まあ白騎士事件やらかすような人だし、問題ないか。

義務教育の汚点は全て教師が被るものだしな。

問題児は教師が手綱を握っていないから問題児なのだ。

そういう意味では、千冬さんは教師に向いているのかも知れん。

強いからな。

手続きと根回しと洗脳が終わったので学校に通うことに。

気高き箒と同じクラスだ。

道場での一件のせいか、箒の視線が冷たい。

まあどうでもいいがな。

アクション映画の話題を振って、クラスメイト達との友好を図る。

思いの外良好な反応、やはり映画は偉大だな。

アクションといえば、という流れでスマブラというゲームをすることになった。

その集まりの中にいた一夏という少年が俺の右腕を凝視している。

どうしたの？

「いや、なんか違和感が……うーん、気のせいかな」

これが第六感というやつか。

まあ左腕と違って曲がらないところまで曲がったりするから、バレる時はバレるんだ

よね。

「そんなことより乱闘しようぜ！」

弾、というイカした名前の少年の一声で、一斉にコントローラーを手にした。

一番有機物っぽいピンク色のキャラクターを選ぶ。

さあ、お前の能力を寄越せ！

◇◇◇◇

機械的で冷たいNo. 18とNo. 7に比べて、

スマブラしたりドッジボールで一對四やっている内に俺はすっかり溶け込んでいた。

道徳の時間以外で俺に叶うクラスメイトはいない。

母への手紙？

そんなものはfuckで十分だ。

名前の由来？

有機物の有機だよ。

担任に引かれながらも授業が終わり、放課後となる。

忘れ物をしたという一夏と共に教室に来てみれば、何やら騒がしい。

三人の男子生徒が気高き箒を苛めているようだ。

「男女のくせに！」

「そうだそうだ！」

そんな言葉が聞こえる。

研究所で両性の実験体を見た俺からすれば、
箒が短髪で半袖短パンだとしても十分女に見える。
見識の狭い奴らだ。

一夏が突撃し、箒を庇うようにして立ち回る。

俺は苛めつ子達の膝裏を蹴って回り、さり気なく髪の毛を引っこ抜いた。
クローンのバリエーションを増やす為に使わせて貰おう。

その後、互いの両親を交えた反省会の始まる。

憤慨する苛めつ子の親の怒声に、それで？と繰り返し答えるNo. 18を頼もしく思
いながら、

来賓用の羊羹を一夏と箒を交えて食べる。

反省しなさいと言われたが、俺は膝かつくんして遊んでいただけだ。

そうだろう？ と苛めつ子達に同意を求めると否定されてしまう。

まあどうでもいいことだ。

妹を苛めた生徒を束さんが見逃すとは思えん。

家族愛とは素晴らしいな。

No. 7にそう聞くと、そうですねと返される。

これが模範というやつだ。

◇◇◇◇

圧力を受けると硬度と弾性を変化させる合金が完成した。

融点も果てしなく高い。

さつそく生産体勢に入るが、複数の素材をナノマシンで分解、選別、合成という過程もあつてか、生成率が低く時間が掛かる。

素材の入手も近場の工場を潰し過ぎたのでそろそろ品切れだ。

洗脳規模を広げて、資材をちよろまかす必要があるだろう。

レーザー砲のシミュレーションは未だ終わらず、付けっぱなしのPCが再計算を繰り返している。

これは時間の問題か。

◇◇◇◇

時は立つのは思っていたより早い。

単調であればあるほどそうだ。

ISを使った競技技である第一回モンド・グロツソとやらの開催と同時期に、政府の保護プログラムとやらで篠ノ之家は一家離散するらしい。

気高き筈が一夏に離れたくないと縋り付いている。

それを仕方無いという言葉で引き剥がす一夏の姿に冷徹な心が垣間見える。

まあ竹刀を常備している女は嫌だよね。

何度か叩かれてるみたいだし。

守る必要がなく、自衛が出来るパートナーという意味でいえば、優良なのかも知れない。

そういう内容を一夏君に話してみると、男は女を守るものだ、という答えが返ってくる。

格好いいね！

◇◇◇◇

中国からの転校生、風鈴音とやらが人気だ。

パンダの名前と似ているという理由で可愛がられ、顔を真っ赤にして喜んでいる。

やたらと箸を進めるクラスメイトが多いので、試しに一口食べてみる。

「青草っ」

食えたもんじゃねえな。

興味を持ったのか、他のクラスメイト達も一口嚙っては吐き出していく。

パンダブームは終わりを告げた。

一部の男子がしつこく彼女を可愛がっているが、それに対して一夏君が憤慨。

同じネタを繰り返されるほど苦痛なものはない。

初対面の時に顔を殴られたのに関わらず、彼女を庇い苛めっ子を糾弾。

俺は鈴の悪態やらお礼やら何やらを日本語に訳して場を盛り上げた。

研究所に保存されたいた莫大かつ多種多様な論文データを脳にインストールして自我を得た俺は、あらゆる言語に通じているのだ。

やがて勝敗が付き、ヒロイン的立場にある鈴は感激して涙を流す……という訳もなく、

ツンツンしながらも顔を赤くして感謝の言葉を一夏へ述べる。

これがツンデレか。

ツンとデレで差し引きゼロ、無益なものだ。

◇◇◇◇

つけられている。

一流も二流も知らないが、常人では気づきもしないだろう。

研究所にいた人間は一人残らず毒ガスで一掃している。

俺とNo. 18、No. 7のクローンを廃棄場に投げ捨てていったから、向こうは全

滅したと思っっているはずだ。

だが、研究員の離反や実験体による反乱の可能性を初めから考えていたとすれば、

俺を見つけたというのも頷ける。

データベースの中身を脳にインストールして洗脳用のチップを容量過多で破壊した俺と違い、

No. 18とNo. 7には生きたチップが残っている。

中身を書き換えて無力化しているとはいえ、チップそのものは残っているし、

それを探すのは容易だろう。

それにしても時間が掛かったようだが、泳がされていたか……？

せっかくなので防犯ブザーを改造して作った音響兵器の実験台になって貰うとしよう。

指向性はないが、まあ問題ない。

こういうのは即断即決、泳がせて一網打尽にするなんていうのは組織と組織でやることだ。

俺個人の行動に面倒な策など必要ない。

プラグを半分程抜いたところで止め、ランプが光ったところで尾行者のいる方向へと投げる。

手で両耳を抑え、衝撃に備える。

爆音と共に衝撃派が電柱を粉碎し、住宅の窓が割れ、気絶した鳥達が地に落ちた。

住宅街の悲劇というやつだな。

住人たちが何事かと家から現れ、俺の身を案じるような言葉を掛ける。幼さは都合が良くて助かるな。

ジジババと共に爆心地へと向かうと、尾行者は扉にめり込む形で気絶していた。体のあちこちには爆発した防犯ブザーの破片が突き刺さっており、

その一つが頸動脈を傷つけているのが分かった。

こいつはもう終わりだな。

明日の朝刊は住宅街で自爆テロ、になるだろう。

いやあ、防犯ブザーで死ぬなんて哀れな奴がいたもんだ。

◇◇◇◇

あれから数日後、黒服が自宅へやってきた。

亡国企業というらしい。

人造人間であるということをバラされたくなければこちら協力しろという話だ。

「OK?」

あ、脅してる奴俺のクローンですぜ。

「おっけい!」

背後からNo. 7が手刀を叩き込む。

気絶した男を地下へと引きずり込んでいく。

賢者の石の出力が上げるには、より多くの生物が必要だ。

こいつで丁度七十人目だし、次は人間以外の生物を取り込んでみよう。

◇◇◇◇

東さんが遊びに来た。

コアの生産を打ち切り、ラボを使って世界中を旅行するらしい。

せつかくなので、ISを作るに至る動機を聞いてみる。

「宇宙への情熱が大部分ではあるけど……子供の頃に思ったんだよ、大人数で遊びたいって思ってたね！」

笑顔で答えてくれたのも束の間、一転して冷たく沈んだ顔に変化する。

「でも皆は遊びたくないみたい。」

まあ仕方無いよ、東さんは天才だけど皆は凡人だしね。

理解出来ないって辛いことだよ」

どこか諦めが見える。

そんなあなたに、月面アートのカプチャーノをプレゼントだ。

「ふふふ、傷心中の東さんになんというものを出してくれるのだから！」

そういつてカプチャーノを一気飲みする。

実に男らしい。

そのままレーザー砲のシステムを弄り始めた。

なんと、粒子を使うか。

その発想は無かった。

◇◇◇◇

中学生になった。

僕、という一人称から俺へと変わる生徒が随分と多い。

「俺彼女とかいらさないわ」

「俺も俺も」

下ネタで盛り上がる男子生徒達に突き刺さる女子生徒からのキモツ、という言葉が絶食系男子予備軍を増やしている。

未来の日本が心配だな。

少子化になったら大変だ。

それはともかく、第二回モンド・グロツソ出場者である姉の応援にドイツへ旅立つた一夏君だが、どうやら誘拐されたらしい。

駆け付けた姉に救出されるも、誇り高き千冬さんは決勝戦を棄権する形となり、一年間ドイツ軍で教官をするらしい。

一夏の居場所を見つけ出したのがドイツ軍だったそうだ。

それってマッチホンブなんじゃないかと思っただが、ドイツの都合など俺にはどうでもいいことだ。

問題があるとすれば、一夏への風当たりだ。

千冬さんの戦闘に魅了されたというだけあつてか、ファンには過激派が多い。

鈴のパンダブームとは比べ物にならないほどの熱狂っぷりに思わず拍手。

空元気で周囲を欺く一夏に自作した音楽プレイヤーを贈呈する。

クラシックばかりだがね。

高そうなものは貰えないと断られるが、

時には耳を塞ぐことも大切だ、とそれっぽいことを言っつて押し付ける。

これで俺の道徳レベルが上がったな。

次の授業が楽しみだ。

◇◇◇◇◇

道徳1。

人間って分からん。

失踪扱いになっっているが、何故か遊びに来た束さんにそのことを聞いてみる。

束さんも1だったらしい。

仲間ですな。

「ちーちゃんは家庭科が1だったよ！ あれは笑えたなー！」

いいね、親友がいるって羨ましいよ。

一夏や弾とは友達だが、親友ではない。

俺も気づけばクラスメイトから不思議ちゃんみたいな扱いをされるし、正直いつて学校はつまらん。

「ゆーくんも親友だよ！ さあ、この胸に飛び込んでおいで！」

飛び込む前に束さんが迫り、捕まってしまう。

柔らかい。

これが母性か。

涙が出ないのは俺がスケベなのか、それとも道徳が1だからなのか。

答えはない。

◇◇◇◇

劣化した足を取り替えて登校する。

なんと鈴が帰国するらしい。

それなりに話す仲だったので、女友達が減ることに寂しさを覚える。

だが俺のピュアな心が彼女を引き止めるとかそういうことはなく、

別れに焦りでも感じたのか、酢豚、という言葉を使って一夏にプロポーズをしていた。だが真剣な顔で頷く一夏の両耳にはイヤホンが！

そろそろ切りたいな、と言うぐらいには伸びた髪がそれを隠している。

首元を見れば分かるはずだが、緊張してガチガチな鈴はそれに気がついていない。

学ランに黒いイヤホンと黒い髪、相乗効果は抜群だ。

まあ弾君と一緒に盗み聞きしているので、一夏には伝わるだろう。

応えるかは知らんがね。

◇◇◇◇

受験場を間違えた一夏がISを動かしたらしい。

最初のコアが千冬さん用に作られたのなら、後続機を親族の一夏が動かせるのも頷ける。

血がなせる業に哀れみを覚える。

間接的かつ政治的理由とはいえ、ISの世界大会で酷い目にあつた一夏は、これからは直接的にISと関わっていくのだ。

女ばかりの環境でな……。

一夏が動かせるなら、つてことで男のIS適性を一齐に検査することになった。

まさか人造人間の男に動かせるつてことはあるまい。

と思つていたがそんなことは無かつた。

「え？」

「は？」

IS動いちやつたよ。

まあ動いた物は仕方がない。

進路変更だ。

入学前に足を洗っておくことした。

具体的には洗脳した役人達の始末だ。

NO・18とNO・7のクローンをトラックで轢き殺、いや事故死したことにして、整形させたオリジナルの二人に暗躍させる。

役人たちは一人ずつ、確実にナノマシンで洗脳チップごと分解処理することにした。専用の銃と弾丸も用意している。

衣服はおろか脛毛さえ残るまい。

しばらく世間が騒がしくなるだろうが、俺はIS学園で青春してるから関係ないね。

公的な立場というのは実に都合がいい。

さて、この任務が終わったら二人に長い休暇を与えてやろう。

どうも演じている時間が長かったせいか、NO・18は鬼道タケル、NO・7は鬼道ヨウコで固定されてしまった。

性交はしていないようだが、添い寝や膝枕といった行動記録がある。

俺に対する忠誠心は不明だが、まあ求めてないしそれはいい。

ああ、そうだ。

賢者の石の出力が安定したことで、ついにラボが地下へ潜行出来るようになった。燃料も一人っ子政策を守らなかつたどつかの国のおかげでしばらく困りそうにない。なので家も焼いておこう。

これぐらいの悲劇性があれば、マスコミや宗教関係も手を引くだろう。しつこいようなら同じ目に合わせてやる。

◇◇◇◇

葬式屋というのは、ハイエナに近い生態を持っているようだ。

高い金を払わせようとする魂胆が見え見えだ。

まあそういう連中は棺の中で自らに掛けられた金額を知って満足するだろう。

生きたまま火葬されるなんて人生で一度しか出来ないしな。

偽装の為に犠牲になったクローン二名の葬式は略式で行われた。

まあ遺体がぐちやぐちやなので焼いて骨粉を壺に詰め、近所の寺から七万円で雇ったお坊さんがお経を唱えるだけだ。

三日で作ったクローンの骨なのでカスみたいなものだが。

そもそも存在しないのだが、あの二人は駆け落ちした設定になってるので親族は参列していない。

御近所さんと二人の職場の同僚たちが多くを占めていた。

基本的に、あの二人には極力模範的に過ごすよう命じていた。

その実態は、健康で無遅刻、要領も良く仕事をこなし、飲み会の付き合いも良い、というものらしい。

部長さんが言うにはやや常識に欠けていたようだが、完璧そうに見えて抜けたところがある分可愛げがあったようだ。

息子という設定である俺に対しても親身になつてくれる。

何かあつたら力を貸してくれるそうだ。

辛くなつたら学園なんて辞めて息子になれという人も居た。

こういう人達つてきつと道徳で5を取つて来たんだらうな。

素晴らしい心をお持ちだ。

だがしかし、人造人間でシリアルキラード男のIS適合者な俺の面倒を見れる人間が果たして存在するのだろうか？

答えはNOだ。

「IS学園で頑張ろうと思います」

ちよつとナノマシンを弄るだけで涙を流せるこの体は実に使い勝手がいい。

困難へ立ち向かう幼き勇者を演出出来るのだからな。

大人に混じって悲痛な面持ちしてる一夏や弾たちへの体面というのものもあるがね。

これからはアドリブの出来る人造人間が求められるのだよ。

◇◇◇◇

いよいよI S学園へ赴く日となった。

テレビ局が一つ無くなったようだが、まあ世間を賑わすという点でいえば本望なんじゃないかな。

俺が両親を殺したとかいう報道は中々の射を射ていて面白かったが、国民にゴミダクズだと酷評されていたので民意を尊重し、潰すことにした。

やはり狙い目は出資者だな。

寮生活になるらしいので、ラボは海底に待機させておこう。

キヤリーバッグに必需品を詰め込んでホテルを出る。

家を焼いた際、いつの間にやらNo. 18が保険に入っていたらしく、結構な額の補償が入ってきた。

おかげで桁が一つ増えた。

遺産って素晴らしいな。

駅へ到着。

通勤、通学などの人々で混雑している。

「ちよつと、どこ触つて——」

いきなり人の腕を掴むとは失礼な人だ。

反射的に手の甲から右腕のブレードが飛び出し、女性の脇腹へと突き刺さる。

先端部から分解処理用のナノマシンが注入され、ブレードを収納すると三秒ほどして衣服が重力に従つて下へと落ちた。

『現在停車中の列車は——』

アナウンスが鳴り、人の波が幾つかに分かれて車両へと雪崩れ込む。

乗るしかない、このビッククウエーブに。

◇◇◇◇

前後左右に女子がいる。

一夏は右前方だ。

大部分の視線はネームバリエューもあつてか一夏へ向けられている。

そして一夏の視線は助けを求めるように俺へ向けられる。

だが俺は形態端末を使つてちよつとしたゲームに忙しい。

旅客機をレーザーで撃ち抜くゲームだ。

衛生とリンクさせて狙いを付けるが、中々難しい。

射角修正、発射。

おお、一撃で轟沈とは、さすが兎印のレーザー砲だぜ。

「織斑君？ 織斑君！」

幼さを感じさせる声に我に帰る。

どうやら教師は既に来ていて、自己紹介の途中らしい。

多数の女子生徒の視線に怯みながらも、一夏は名乗りをあげた。

「織斑一夏です、よろしくお願ひします……以上です」

クラスメイト達がずっこける中、一夏は遅れてやってきた千冬さんに出席簿で脳天を叩かれた。

ハンマーで殴ったような音がする。

さすがは世界最強だ。

「諸君、私が1年1組担任の織斑千冬だ。

私の仕事はこの1年で諸君らに最低限の基礎を叩き込むことだ。

私の言うことを良く聞き、そして理解しろ。

逆らってもいいが、それ相応の罰があることを覚悟したまえ。

いいな」

軍曹めいた発言に応えたのは、女子生徒達の歓声だ。

同性からの人気は計り知れない。

結局、女子生徒達を怒鳴ったり、一夏を叩いたりしている内にチャイムがなり、自己紹介をすることなくSHRは終了した。

去りに千冬さんが哀れむような視線を向けてきた。
身に覚えがない。

◇◇◇◇

休み時間になると、箒が一夏を連れてどこかへ消えた。

正確には俺も連れ出されるはずだったが、男二人に対して女一人というのは非常に絵面が悪い。

俺は未来人ではないのだ。

二人で仲良く青春しているがいい。

生徒達は俺の両親が割と最近死んだってことを知っているらしく、近付いてくる様子はない。

それが自作自演だとも知らずに……間抜けな奴らだ。

暗記済みの参考書を適当に流し読みしていると、袖を余らせた女子生徒が間延びする声で自己紹介してきたので、こちらも適当に返す。

彼女が言うには、新入生が一人来ていないらしい。

どうでもいいことだ。

授業が始まり、山田先生が教鞭を取る。

挙動不審の一夏に誰も注目している。

「解らないところがあつたら訊いてくださいね。何せ私は先生なのですから」

柔らかい笑みを浮かべ、胸を張る山田先生に一夏は答えた。

「全然わかりません！」

鬱屈としていた中学時代と違って実に清々しい。

呆然とする山田先生に代わって千冬さんが聞くと、参考書を電話帳と間違えて捨てた

らしい。

えぐい音がするぐらい叩かれたが、何だかんだで再発行して貰えるようだ。

「ISは過去の兵器を遙かに凌いでいる。

そう言ったものを深く知らずに取り扱えば必ずしも事故が起こる。

理解できなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ。

……諸君らの中には、自分は望んでここに在るわけではないと思っっている者もいるだ

ろう」

束さんが望んだのか、それともISが望んだのかは分からないが、望まれたからには

応える選択肢がある。

俺はそれを選んだに過ぎない。

状況を楽しんでいるとも言えるが。

「人は人と、つまりは集団の中で生きなくてはならない。

それすら放棄するなら、まず人であることを辞めるものだな」

用意された台本めいた言葉で、千冬さんはそう締めくくった。

人造人間は人に入りますかー？

正確には試作機操兵二号機なので人というよりサイボーグだが。

しみみりした空気を打破するためか、山田先生がやや大きめの声で授業を再開する。

ぎこちない学校だなー。

◇◇◇◇

「助けてゆうえもーん」

そういうのは東さんにやって欲しい。

たばえもん、素晴らしい語呂だ。

とりあえず要点だけ纏めたメモを一夏へ渡す。

これはダメ、あれはダメ。

それだけ分かって入れば十分だろう。

「ちよつとよろしくって？」

時代錯誤も甚だしい髪型をした女子生徒が話しかけてきた。

この手の人間は賢者の石に登録していなかったな。

とはいえ、ここまで目立つ相手だと捕らえるのは難しいだろう。

「よろしくないな」

「何ですのその返事は！ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「素晴らしい滑舌と肺活量だが、俺はよろしくない。一夏、相手をしてやれ」

「まあメモ貰ったし……えっと、君の名前は？」

「わたくしを知らないですって!? このセシリア・オルコットを!? イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を!？」

二人のやり取りをどこか遠くに感じながら、携帯端末を取り出してNo. 18からの定時連絡を確認する。

複数の国の言語を組み合わせたメッセージなので、平和ボケした学生に見られても問題ない。

どうやら、役人が集中的に狙われていることは周知の事実となりつつあるようで、警備が強化されたとのこと。

今更だが、教育委員会や第三者委員会まで洗脳範囲を広げたのは間違いだったかも知れん。

『警備諸共消しましたけど問題ありませんよね?』

ああ、実に問題ない。

その調子で頼む。

せっかくなので無関係の人間を何人か消すといい。

そうだな、顔面偏差値なんかで消すと捜査を攪乱させることができるかも知れん。

世の中五体満足な生物が多すぎる。

『試してみます』

避妊しろよ、と最後に日本語で返信して端末を閉じる。

そろそろ次の授業が始まる時間だ。

◇◇◇◇

クラス代表を決めることになった。

どんな役割かと言えばクラスの顔、まとめ役、担任教師のパシリ。

中学時代の委員長とあまり変わらないな。

「自薦他薦は問わない。意見あるものは挙手をして発言しろ」

千冬さんの言葉に応じて、女子生徒達が手を上げた。

それぞれが名前を呼ばれるより早く、皆口々に一夏を推薦していく。

「俺!」

驚いて立ち上がった一夏は辞退しようとするが、千冬さんに諭されて屈したように席についた。

しかし、ふと何か思いついたかのように再び立ち上がる。

「俺は有機を推薦する！」

一夏がそう宣言すると、少数だが女子が俺を推薦していく。

それに対し、数秒ほど無反応を装ってからゆつくりと立ち上がる。

苛立ち、怒りを想像したのか、口を閉じて静かになるクラスメイト達。

気分を良くした俺は統領気分で演説を始める。

「どのような組織であれ、代表というのは羊ではなく獅子として振る舞うことが求められる、というのは周知の事実だと思う。

そこで諸君らに一つ提案がある。

一夏とかいう羊の推薦を取り消してみないか？

なあと、一度や二度の撤回ぐらい、織斑先生なら分かってくれるさ。

情けない弟を矢面に立たせたくないだろうしな」

「なつ、馬鹿をいうな！ それなら自薦してやる！」

「やる気があるみたいなので一夏君を推薦します」

「え？ ……はっ!? ……しまった！」

「……乗せられるな、馬鹿者。 鬼道も冗談は慎め」

「は、」

まあこのままいけば多数決で一夏が代表だ。

民主主義つて素晴らしいね。

袖を余らせた女子が執拗に俺を推薦していたのは嫌がらせかな。

それとも孤独な男子に付け入る女の技か。

無駄なことだ。

「待っててください！ 納得できませんわ！」

待ったを掛けたのは時代錯誤も甚だしい髪型をした女子生徒だ。

猿、男、弱者、国の品格などなど。

見た目にマッチするような暴言の数々に一夏が反撃。

祖国とメシマズという言葉が飛び交う舌戦を讃えて思わず拍手だ。

「素晴らしいヒステリーだ。 精神科医の名前を教えてください」

「だ、だ、誰がヒステリーですって！ 極東の猿の分際でよくも私を侮辱しましたわね

！」

「I was made in Japan. It isn't a monk

y.」

「フアアアア！ 決闘ですわ！ 二人共完膚なきまで叩きのめして差し上げますわ！」
 「あれ？ bornじゃないのか？」

アイワズボーン、インジャパツ」

俺と似た英語を使おうとして、一夏が千冬さんに叩かれた。
 「それぐらいにしておけ。」

3人には一週間後の放課後、第三アリーナにて試合をしてもらおう。

オルコット、織斑、鬼道は準備をしておけ。では授業を始める」

一度でいいから、この人のヒステリーも見てみたいものだ。

◇◇◇◇

初日の授業が終わり、荷物を纏めていると山田先生が現れた。

寮の鍵を渡しに来たとか。

一夏が姉から着替えと携帯の充電器だけを受け取っている。

俺があげた音楽プレイヤーはどうしたと聞くと、制服の内ポケットに常備しているとのこと。

物持ちがいいな。

寮へと向かおうとする前に、千冬さんに呼び止められる。

「久しいな、鬼道」

「そうですね」

「……両親のことは残念だった。保護プログラムがあつたにも関わらず」

「お気になさらず。もう終わったことなんで」

始まったともいえるがね。

「だが」

「運が悪かつただけの話です」

「有機君、そんな悲しい言い方は……」

「そう言われましてもねー」

自作自演だし。

たかがクローンがグチャグチャになつたぐらいでお涙を期待されても困る。

道徳1は伊達じゃない。

困惑する山田先生と千冬さんを置き去りにして、一夏と共に寮へ向かう。

親を知らないという一夏は何か思うところがあるのか、蒸し返してくることはない。

まあ葬式にも来てたしな。

代わりという訳ではないと思うが、チョコチョコ姉の話しを混ぜてくる。

家事が全く出来ないだとか、下着を脱ぎ散らかすとか。

クールビューティが実はズボラとか、有りがちな属性であざとく見えるな。

そんな感じで雑談しながら数分も歩けば到着だ。

俺と一夏は番号が違うらしい。

すなわちルームメイトは女子生徒だ。

1010号室に着いた俺は扉をノックをした。

しばらく間が空いて、扉が開く。

水色の髪に赤い瞳の、眼鏡をかけた気弱そうな女子生徒だ。

俺の姿を見て驚き、目を見開いている。

その目の前に鍵を持ってくると、納得したのか落ち着きを見せた。

「……よろしく?」

「ああよろしく」

ルームメイトの名前は更識簪というらしい。

メモっておけば覚えられるんじゃないかな。

それより問題はこの部屋だ。

機械達の視線を感じるぞ。

実験室で幾度と無く感じたものと似ている。

あらゆる死角に隠しカメラと盗聴器が仕掛けられているに違いない。

余り気分のいいものじゃないな。

使っていない方のベッドに荷物を置き、キャリーバッグからノートパソコンを取り出す。

No. 18とNo. 7の仕事の進行具合をチェックだ。

おお、あと少いで五割のターゲットを始末出来そうだな。

F地点に支援物資を支給しておこう。

「……なにしてるの?」

いつの間にやら、後ろに回って興味深そうにこちらを見ている。

「ちよつとしたシミュレーションゲームだ。

これがスパイ工作の進行速度、こつちが目標の選択というわけだ」

「そ、そうなの? でも何か違うような……」

「リアリティを追求した作品だからな。そう思われても仕方無い」

別のソフトを起動させる。

ふーむ、こつちの進行度は四割といったところか。

刃の重金属の生成に手こずっているようだ。

まあこれは時間の問題だろう。

もう一つの進行度は三割つてところだ。

「IS用の、刀? それに、心臓?」

「興味津々なのは結構だが、一方的に見るといのはよろしくないな」

「ご、ごめんなさい。 つい……」

「分かればいい。 自分の作業にでも戻るんだな」

「……うん」

「ああ待て」

「な、なに？」

シャワー時間や着替える時などの取り決めを決める。

こちらから提案してやれば勝手に頷いてくれるから楽でいい。

簡単な夕食を取って、眠るとしよう。

快眠、というか俺は夢を見ないのでよく分からない。

夜遅くまで作業をしていたかんざつしーは起きてはいるが、ぼーとベッドの上で呆けている。

フリスクを投げ渡し、顔を洗って食堂へ向かう。

道中、一夏と気高き箒と出会う。

一夏のルームメイトらしい。

昨日は随分騒がしそうにしていたが、その割にはギスギスしている訳でもない。

騒ぎただけだったのかな。

「久しいな、鬼道」

「そうだな、気高き箒よ」

「その呼び方はいい加減やめてくれっ！」

「気高きっつてうお!?!」

一夏にそう呼ばれるのは恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして両肩を掴み、鼻先が触れるぐらいの距離でやめてくれと懇願する箒。

一夏も恥ずかしそうで、我に返った箒は慌てて距離を取る。
初々しいね。

◇◇◇◇

授業の前に、千冬さんが一夏に専用機が用意されるとの旨を伝えていた。
専用機か。

出来ることなら、機体を選ばずに使いこなすようになりたいものだ。

一夏が教科書を音読すると、一人の女子生徒が手を上げた。

「篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか………?」
千冬さんはそれを肯定した。

箒の元へ女子生徒達が集まり、それぞれが口を開く。

「あの人と知り合いなの?」

「IS制作に関わってるの?」

「専用機持つてるの?」

などなど。

無遠慮とはこういうことを言うんだな。

「私はある人と関係ない!」

箒自身の一喝によって女子生徒達は席へと戻り、授業が始まる。

そして放課後、一夏と箒が決闘に備え、道場にて訓練をするらしい。俺も誘われたが断った。

「……鬼道、剣道は嫌いか？」

「嫌いだな。俺が好きなのは刃物であって、剣道ではない」

「……」

何やら消沈しているところを一夏が励ます。

「俺は好きだぜ」

いい台詞だな。

「おめでとう箒！」

「おめでとう〜」

「めでたいな！」

「おめでとさん！」

俺が二人を祝福すると、どこから沸いたのかノリのいい女子生徒達が続いた。顔を赤くした箒が一夏を引っ張るようにして逃げていく。

仲が良くっていいね。

「ゆっきーはキューピットなんだね」

三分もあれば余裕余裕。

とりあえずI Sを使って訓練しようと思ったが、既に予約が詰まっているらしい。あのヒステリーとグルなんですね、と山田先生に言うと言顔を青ざめて何とかしますとのこと。

教師の鏡やで。

賢者の石に取り込みたい。

◇◇◇◇

一夏の頭から煙が上がっている。

P I Cや量子化は難しかったようだ。

箒が珍しく優しさを発揮して、一夏にノートを見せている。

俺のメモはもう要らないな。

「やっ、ちよつといい？」

昼食として豪勢にパフェを食べていると、見知らぬ先輩が正面に座ってきた。

水色の紙に既視感を覚える。

恐らくはかんざっしーの親族だろう。

「I Sの訓練について、なんだけどね」

先輩が直々にI Sについて教えてくれるらしい。

口調としては優しげで余裕があるように見えるが、どうやら違うらしい。

周りの女子生徒達が恐れて近寄ってこないことが考えて、隠しきれない程の怒気、敵意があるのだろう。

ここで切るべき手札は、逃げや受けに回ることではない。

挑発——所謂様式美というやつだな。

「訓練とは言いますがね。」

女子高生が相手ではいつ後ろから撃たれるか分かりませんな」

遠回しな女尊男卑に対する皮肉めいた言葉を返すと、先輩はニヤリを笑みを浮かべた。

「私なら引き金を引く前に槍で貫くわ。」

今のあなたが相手なら、その方が早い」

面白い冗談だな。

◇◇◇◇

決闘まであと三日といったところでアリーナの使用許可が下りた。

山田先生がもぎ取ってきた打鉄を使って訓練をする。

何だかんだで水色髪先輩の教え方は上手く、分かりやすい。

とある市役所の人間が消えたとか、住宅街で爆発事件が起きて身内が死んだとかいうバカバカしい話題さえ無ければパーフェクトだったか。

それとは別にここで驚きなのだが、なんとISとのコミュニケーションを取ること
に成功した。

まあチャット形式なんだが。

ISコアがこんいちわと入力してもISには表示出来ないが、半機械化された俺の脳
をWi-Fi的に使うことでISに表示しているらしい。

ISコア↓俺の脳↓ISにチャット。
ということらしい。

俺の脳をISコアに使われていることに思うところはあがるが、脳の稼働率には余裕が
あるし、便利だからいいか。

思念操作で入力が出来るのは楽でいい。

『この機体との同調限界は50%です』

生体維持機能や各種システムに使われてるナノマシンを俺の神経系を同調させるこ
とで、かなり強引だが稼働率を上昇させる。

脳の演算システム使用率が83%まで上昇し、徐々に下がっていく。

同調にはかなり演算領域を使うようだな。

『受信したデータとの同調を開始』

脳にインストールしておいた各国代表の動きをIS側へと送信し、同調したナノマシ

ンと神経を介して少しずつ再現していく。

打鉄側の補助もあってか、本物の五〜七割程度であれば問題無く動けるようだ。

それ以上は機体を持たない、というか打鉄は機動性より防御力を重視した機体だから適性の問題だな。

なので出来ることをしよう。

『警告、六時の方向』

逆様の状態で瞬間加速をしたり、片側のスラスターだけで加速することで高速回転したりしていると背後から銃弾が飛んでくる。

それを打鉄の非固定浮遊装備の盾に角度を付けて受ける。

ISのハイパーセンサーと機動性があれば、射線に対して最適な角度を算出し、位置取ることは容易い。

『右盾の損傷率7%』

打鉄側からのサポートもある。

かつて剣や槍から銃への近代化の真つ只中にあつた中世でも、盾に角度を付けて銃弾を弾きながら前進する変態的な歩兵軍団が居たらしいし、現代でも可能だろう。

それにこの盾は、損傷してもエネルギーを使うことで再生するらしい。

一桁レベルの損傷なら余裕だな。

やがて水色髪先輩の先輩に注意されて銃撃していた女子生徒が退散していく。

女尊男卑とか都市伝説だと思っていたが、実際にいるとは驚きだ。

こっちは性別以前に性能で差別してたから些細なことだが。

「素人には思えない動きね。有機君、あなたは何者なの？」

スタイリッシュな専用機・ミステリアス・レイデイの水のドレスを揺らしながら、水色髪先輩——打鉄を通じてISネットワークとやらから得た情報によれば、IS学園生徒会長、更識楯無。

本名では無いらしく、それを知るISが沈黙していて聞き出せないらしい。

政治家じゃあるまいし、本名などどうでもいい。

気がつけばアリーナには俺と会長さんしかいない。

いや、かなり上空にIS反応がある。

これは山田先生かな。

となると先程の女子生徒も仕掛け人の一人か。

打鉄が言うには布仏虚、というらしい。

いい名前だ。

「ノーコメントで」

適当に返答すると、ランスを突きつけてきた。

蒼流旋、ねえ。

ガトリング内蔵とは怖い怖い。

「あなたの経歴は綺麗過ぎる。

周りで起こした事件に比べて、余りにも綺麗過ぎる。

有りもしない報道をしてあなたを貶めたとはいえ、

テレビ局が僅か一ヶ月で潰れるなんてどうかしているわ。

もう一度聞いわ、何者なの？」

何やら強い敵意を感じる。

情報によれば、彼女は日本の対暗部の暗部組織の当主とのこと。

その立場からして、市役所の職人や警察官、教育委員会やその他のいろいろの洗脳を行い、今はそいつらの抹殺を命じている俺は相当な悪なのかも知れない。

テレビ局の一件も加えて、そういった疑いのある危険人物が妹と同室となれば、敵意が剥き出しになっても仕方が無いか。

家族の絆ってやつだな。

うむ、俺も人間の感情が少しずつ分かってきたようだ。

軽く咳払いをする。

「んん、そこまで言うなら教えてやろう。」

鬼道有機というのは偽名だ。

本当の名前は試作機操兵二号機、略してN o. 2。

二郎と呼ぶ研究員も居たな。

生まれは試験管の中だ。

母乳の代わりにナノマシンとエネルギーパックを注入され、

三週間で五歳児相応の体へと急成長し、

小麦アレルギーで死んだN o. 1に変わって主要な実験体となった。

まず最初に脳の改造を受け——」

「ちよ、ちよつと待って！」

「物心がついたころには、既に脳は機械化されていた。

脳の約七割が機械であり、生体組織は三割しか残っていない。

その後は脳にインストールされた動きで銃弾を躲したり、

時に掴み取ったり切り払い、生意気なN o. 3をぶつ殺したり、

内圧弄って水圧に対抗したり、ピンを抜いた手榴弾を胸に叩きつけたり、

サウナの中で一週間過ごしたり、夢のある薬をがぶ飲みしたりしていたら——

俺以外の実験体は死に絶えていた。

なんと当時二歳だ！

体は六歳相当だったがね。

研究員たちからすれば、小さい体に異常な力というのは様式美らしい。

体格のいい男は幼女に叩きのめされるのが仕事とかどうとか……まあどうでもいいか。

そんな彼らは蠱毒の勝者となった俺の遺伝子を喜々として培養し、いろいろ手を加えて新しい機操兵を作り始めた。

だがまあ、増えすぎてちよつと気持ち悪くなつて来たので、当時研究中だったウイルス兵器で皆殺しにしてやったよ。

強化ガラス越しにワクチンを見せびらかすのは楽しかったなあ。

二人だけウイルスに適合していたので連れだったが、まあ身の上話はいくらか
「ええつと……」

我ながら良く回る舌だ。

会長さんはミステリアス・レイデイが文章化したものを何度か読み返し、
ようやく顔をこちらへ向けた。

「……これを信じろというの」

「全部うっそびよーん」

会長さんの額に青筋が浮かび上がる。
まるで漫画だな。

「……もう一つ聞かせて頂戴。

ルームメイトのこと、どう思う？」

「余り価値は無いな」

青筋が一つ増えた。

「これは面白い。」

「だが数少ない価値があるとすれば、それは名前だな」

「名前ですって？」

「更識簪、珍しい名前だろう？」

そのままでもいい響だが、せっかくなので心の中ではかんざつしーと呼んでいる。

ミツフィーに近い響きがあつてお気に入りだ」

ミステリアス・レイディの生態維持機能が仕事をしていないな。

蒼流旋を持つ腕が震えているぞ。

「……楯無の私は、たてなっしーになるのかしら？」

「姉の方は別に……」

アクア・ナノマシンを纏った槍が迫ってきたので、打鉄の盾で防御する。

二枚重ねの盾を槍先が突破し、先端部にエネルギーが収束していく。
ミストルテインの槍、か。

かなりのエネルギーを感じるが、打鉄の装甲とシールドエネルギー、絶対防御で耐えられるかな？

『死ぬほど痛い、と判断致します』

マジで？

『うい』

急に碎け始めたなこいつ。

シンクロの影響かな？

エネルギーが炸裂する。

結論から言えば、俺は生き残った。

シールドエネルギーとは別に、俺の体の表面を覆う流体ナノマシンが飛散し、衝撃を殺したからだ。

手榴弾程度なら無力化出来る。

まあ今回はそうもいかないようで、殺しきれなかった衝撃によってアバラに罅が入っているようだ。

内臓もいくつか出血している。

機械化されていない部位のあちこちに裂傷が見られる。

衝撃を殺したとはいえ、砕けた装甲や盾の破片で皮が裂けてしまったようだな。体内の余剰ナノマシンを使って止血、および代謝の活性化を行う。

裂傷の完治が四時間、内臓とアバラが丸一日つてとところか。

その間は痛覚を切らないと痛くて歩けないのが難点だな。

夕食も多めに取らないといけないな。

下半身は打鉄の装甲が集中していたおかげで、上半身に比べてダメージは少ない。

機械化された両足は、生体組織とは比べものにならない強度がある。

砕けた装甲の破片が刺さるようなことはなし、痛みもない。

歩行に問題はないな。

「こ、こんなつもりじゃ、いやでもなんでそんな平気そうな顔を——」

「やり過ぎだ」

会長さんだが、爆発の直後に現れた生身の千冬さんにIS諸共引っ掴まれてどこかへ消えていった。

上空の山田先生同様、どこからか見ていたのかも知れない。

ISのセンサーに映らないとは、さすがは世界最強だ。

さてさて、打鉄君は大丈夫かい？

『うい』

さすが専守防衛国の機体だぜ。

装甲は殆ど残ってないけどね。

山田先生が慌てた様子で空からやって来た。

ラファールを纏っている。

「大丈夫ですか有機君！」

「大丈夫です山田先生」

「ええ!? いやいやそんなボロボロなのに本当大丈夫なんですか!？」

「大丈夫ですよ山田先生。生徒の言葉が信じられませ、ゴホッ」

「ああ! 有機君が血を吐いた! 強がってる場合じゃありませんよ!」

「それはともかく、上空からの援護射撃があれば、こうならずに済んだと思いませんか？」

「っ、それは」

「そんな先生にお願いがあるんですが」

山田先生にズタボロになった打鉄を押し付け、血を拭いてアリーナから出る。

痛覚を切って歩くのは久しぶりだな。

まあ昔ほど神経が残っている訳ではないが。

夕食にはまだ早いので、一夏の様子を見に剣道場へ。

箒の竹刀に一夏が一方的にやられている。

打ち込まれる度に一夏は闘志を燃やし、何度も挑みかかる。

青春つてのはこういうのを言うんだらうな。

邪魔をしてはいけないので踵を返す。

俺も刀一本で会長に挑めば、こんな感じになつていたのだろうか？

答えはない。

保健室をスルーして自室へ向かっていると、片付けを終えたのか千冬さんと山田先生、そして生徒会長が慌てた様子で追ってきた。

生徒会長の動きが鈍い。

尋ねてみると、ミストルティンの槍を制御し切れず、反動でダメージを受けたらしい。

「大変ですね」

「……ええ、自業自得よ」

三人からの謝罪と身を案じた言葉、その中に混ざる俺への探りを聞き流していると、両肩を掴まれた。

「有機、まさかとは思うが痛覚がないのか？」

「っ、そんな」

山田先生が顔を青くした。

大袈裟な……オンかオフかの話だろうに。

「異常はありませんよ。」

俺は正常だ」

ポケットに忍ばせておいた打鉄の装甲片を取り出し、生徒会長へと投げ渡した。
「俺が打鉄より硬くてよかったですね」

(意味深)

こういう台詞を一度で良いから言ってみたかったんだよ。

腕を振り解き、自室へと向かう。

追ってくる人間はいなかった。

少し残念。

◇◇◇◇

ふーむ、No. 18とNo. 7に疲労が溜まっているな。

休むよう命令を出す。

ユーラシア大陸を潜行中のラボに資源探しをさせていたが、希少な素材を大量に入手出来たようだ。

中国の地下資源も馬鹿にならないな。

採掘の関係上、中国各地で陥没や土砂崩れが起きてしまったが、まあいい。

ノートが多いと聞くし、これを機に土木へ就職する人が増えることを祈ろう。

それにしてもかんざつしーの機嫌が悪い。

タイピングの音が昨日より大きい。

特にエンターキーを押す時の音が大きい。

妙なポーズを取りながらこちらをチラ見してくる辺り、実はツツコミ待ちだけなのかも知れない。

まあいいか、寝よう。

◇◇◇◇

「久しぶりだねゆうくん！」

夢の中に現れた兎人間に驚きを隠せない。

初めて見る夢に知り合いが出てくるとは、運命ですか。

「必然だぜい！」

東さん曰く、ここは電脳世界らしい。

ISの同調機能とナノマシンを使って操縦者の意識を仮想可視化させてプラグインするらしい。

俺が打鉄と同調したことで、ここへ来るための条件が揃ったとのこと。

今IS持っていないけど、どうなの？

「それは起きてからのお楽しみってやつよ！」

なるほど、粋なサプライズですな。

ところで電脳世界っていうには殺風景ですな。

とか思っていると一瞬で世界が変わる。

足元にはどこかで見えたようなパネルが広がり、俺の体は群青色のタイツと青色の装甲に覆われている。

「ふふふ、東さんのドリームオーラを破れるかな？」

さすがは電脳世界、割とどうにでもなるらしい。

ドリームソードを食らえ！

え、ちよ、三マス目とか届かないから。

しかも東バスターめっちゃ痛い。

更に毒パネルとリカバリー反転だど!?

あ、あ、あ。

デリートされた俺が目覚めると、右手に銀色の腕輪がついていた。

これがISか。

シルバークローズ、というらしい。

直訳で銀服か。

仲良くしようぜ。

おっと形態端末に着信だ。

送り主はシルバークローズ？

本文は——『うい』。

こいつの中身打鉄じゃん。

コア同士で引つ越しでもしたのかな。

千冬さんに事情を話すと、昨日の一件のこともあつていろいろな手続きに関して協力してくれるらしい。

まあ、IS学園の学生が学園所属になるのは簡単なことだ。

◇◇◇◇

決闘当日。

思いの外早く届いた専用機に乗って一夏の試合が始まった。

白式というらしい。

俺なりの応援として放送システムにハッキングを開始。

盛り上がるクラシックをアリーナに流す。

まあ、一夏というよりオルコットに似合いそうな曲ではあるが。

ワーグナーは偉大だよ。

やがてエネルギーを削られ、直撃弾を食らう一夏。

しかしそこで一次移行を終え、姉の名誉を守ると宣言して突撃。

装備している剣が光を帯びる。

あれは零式白夜か。

射撃を掻い潜って接近するが、いざ斬りかかる寸前でシールドエネルギーが尽きた。

用意して置いたツイゴイネルワイゼンを流そうとしたが、システム権限を取り返され、失敗に終わった。

ハッキングは専門じゃないとはいえ、間の悪いことだ。

オルコットの換装、補給、メンテナンスを待つて俺の試合を行うことになった。

ここで千冬さんが辞退の話を持ってきた。

先日の件で負傷したことを思っただことだろうが、今更な話した。

先にアリーナへ出て、装甲を変化させて椅子を作り、そこに座って待つ。

高い視線というのは中々気分がいい。

国王や皇帝というのはこういう気持ちだったのかも知れない。

「……待たせましたわね」

肘掛けの硬さを調整していると、オルコットがアリーナへ現れた。

「随分と余裕ですわね、椅子型のISなんて聞いたことがありませんわ」

「見たものを信じるのは美德だが、無知な子供も同じことをするだろう」

腰掛けていた椅子が変化し、水銀めいた金属が俺の体を這うように広がり、全身装甲が展開される。

液体金属とナノマシンの合金で出来ている装甲は、俺の意思で自在に形状変化が可能だ。

額部分にある制御コアが無事な限り、ではあるが。

コアが無くとも、機械化によって増幅された俺の脳波でも操作は可能なのだがね。

東さんも粋なISを作るものだ。

彼女は賢者の石より価値がある。

俺の準備が整ったを見て、オルコットがレーザーライフルを構えた。

確かスターライトmkIIIだったか。

III、か。

No. 3は雑魚だったが、この銃はどうだろうか。

「その言葉を、先日の自分に聞かせたいものですわ」

心境の変化があったようで、ヒステリーを起こす様子はない。

「薬でもやったのか？ まるで別人だぞ」

「ふふ、あなたはブレませんね。ですが、挑発のつもりなら無意味ですよ」

まあ思いたいように思えばいいさ。

ブザーが鳴り、試合開始だ。

◇◇◇◇

「この、どうなっていますのー！」

レーザーライフルといっても、その本質は銃と変わらない。

質量か、熱量かの違いがあるだけだ。

銃口から射線を、視線や手の動き、表情などからいつ撃たれるかまでを予測し、更にはISの機動性があればレーザーに限らず実弾だって躲すことは容易だ。

まあ集中力の問題で疲れやすいのが玉に瑕か。

スラスターにエネルギーを取り込みながら、牽制用に持ち込んだIS用の拳銃の引き金を引く。

「っ」

人の眼球ほどある弾頭が顔面スレスレを飛んで行くのを見て、オルコットが表情を引き攣らせた。

センサー系が優秀過ぎると、時として恐怖を煽ることになるようだな。

ISのハイパーセンサーで対物ライフルによる人の狙撃を目にした時、どんな反応をするか割と興味がある。

『チャージ率73%』

「行きなさい、ブルーティアーズ！」

ライフルとピット兵器の射撃を同時に躲すのは流石に厳しい。

牽制を止め、地面に降りて回避に専念する。

際どいところをレーザーが横切って行くのは、なまじISのハイパーセンサーが優秀過ぎてはつきり映る。

実にスリリングだ。

思わず笑顔。

まあ取り換えて以来どうも表情筋の反応が鈍いから、微妙な表情のままだと思うが。

『チャージ完了』

ピットによる包囲を避ける為にアリーナのシールド付近まで後退したところで、スラストーに取り込んだエネルギーを開放する。

跳躍と同時に連続して瞬間加速を行い、ほぼ直角の起動をジグザグに刻みながら射撃を掻い潜り、オルコットへ接近。

結構やばいGが掛かり警告が表示されるが、人造人間にその手の心配は無用だ。

右側のスラストーのみで加速することで回転し、その勢いそのまま蹴りを叩き込む。

『オルコット君吹っ飛ばされたー！』

森崎君は優秀だよ。

ただ相手が悪過ぎたのだ。

手足の装甲を刃状へ変化させ、再び加速。

制御が疎かになったピットを体ごと回転して切り刻んでいく。

体勢を整えたオルコットからの反撃のレーザーを半身になって躲し、最後のピットを

掴み取る。

手の平に展開した杭状の装甲で貫くと、ISのモニターに妙に凝ったフォントで破壊

完了の四文字が浮かんだ。

こういう拘り、嫌いじゃないぜ。

悔しそうなオルコットの表情をシルバークローズがアップで映してくれる。

まあこつちもブースト用に取り込んだエネルギー使い果たしているから、五分みたい

なものだが。

手の平の装甲から短槍を引き抜くようにして作り出し、それを投げる。

「え、きやつ」

一瞬驚いたオルコットの顔が映し出されるが、

クルクル回転していたはずの短槍が突如姿勢を変え、槍先が顔面に向かって直進かつ

加速してくると慌ててそれを避けた。

通り過ぎた短槍が反転し、再びオルコットへ向かっていく。
「意趣返しのおつもりですか！」

返答代わりに、二本、三本と短槍を追加していく。

オルコットはスターライトmkIIIで撃ち落していくが、完全に消失させない限り、短槍は再び彼女へ襲い掛かる。

『警告、装甲を使い過ぎです』

もつともな警告だ。

装甲の遠隔操作はエネルギーを食うからな。

だが——気にするな！

『了解！』

力強い返答をありがとう。

手元を離れた短槍を遠隔操作し、様々な方向からオルコットを狙う。
楽しくなってきたので、指揮棒を作ってそれを振る。

今はまだ避けられているが、いずれはパイロットが消耗して直撃するだろう。
ヒス持ちとはいえ、美女を弄ぶことに愉悦を感じなくもない。

そう思わないか？

『ちよ危な』

「うおっ」

遊んだのが行けなかったのか、新しい槍を追加する瞬間を撃たれる。

ヘッドショットつてやつだな。

俺自身はシールドエネルギーと流体ナノマシンのおかげで無傷だが、IS側はかなりのエネルギーが削られた。

やるじゃない。

まあこれでライフルの出番は終了だがな。

スターライトmkⅢには三本の短槍が突き刺さっている。

単発のレーザーライフルで俺が怯むと思わないことだ。

生身なら重度の火傷でのた打ち回っているところだが。

オルコツトはライフルを捨て、ミサイルビットを使つて短槍の群れを強引に吹き飛ばすと、こちらへ一直線に向かってくる。

「インターセプター！」

音声認識と共に現れた小剣を手に突きを放ってくる。

指揮棒をナイフに変化させて小剣を打ち払い、二次元的な起動を描いて応戦する。

ナイフ以外に蹴りや肘鉄、時に回転してカスタムウイングによる打撃を混ぜながらエネルギーを削っていくが、どうにも心踊らない。

機械は人に合わせて作られるものだ。

ISを使つて白兵戦をしていると、人が機械に合わせているようで面白くない。まあナノマシン漬けとも言える俺が言えたことじゃないし、

人間に空を飛びながら白兵戦が出来るかと言われたなら無理なのだが。

『気にするな！』

力強い言葉をありがとう。

「そこですわ！」

わざと受け損ねたかのようにナイフを手放す。

チャンスかと思つたのか、オルコットは小剣を大上段へと構える。

予想を裏切らない人だな。

小剣が振り下ろされる前にこちらから飛び込む。

装甲を集中させ、二回りほど大きくなったシルバークローズの拳を握りこむ。

スラストー全開！

昇竜拳！

『オルコット君吹っ飛ばされた——！』

今度はこの字じゃなくてちゃんと仰け反りながら吹っ飛んだな。

脳震盪を起こしたのかバランスを崩し、落下していくブルーティアーズに糸状に変化

させた装甲を掌から射出し、巻きつけて吊り下げる。

神にでもなったような全能感があるな。

ここが地獄って訳じゃないがね。

試合終了のブザーが鳴り響く。

乙でーす。

5

クラス代表は一夏に決まった。

俺とオルコットが辞退したことによる予定調和とも言える。

あのあと一夏とも試合をしたが、零落白夜がどれほどのものかと思い、斬られにいったら一撃で倒されてしまったからな。

辞退せざる得ないのだよ。

これにはシルバークローズも苦笑していたな。

千冬さんから通信簿の一撃を受けたが、流体ナノマシンのお陰で全然痛く無いので問題ない。

巫山戯るな、と憤慨する一夏に再戦を申し込まれているが、正直めんどくさい。

千冬さんの実戦なら死んでいるぞ、という言葉を使ったゴリ押しで黙らせておいた。

死人に口無し。

そうこうして一夏が渋々ながら代表を承認して席に着くと、オルコットがクラスメイトに対して謝罪を始めた。

要約すれば、日本を侮辱してごめんなさい、ということだ。

俺にも謝ってきたが、正直言ってその必要はない。

侮辱には侮辱を。

あの場でやったのはそれだけだ。

◇◇◇◇

マヌケが見つかったようだ。

恐らく飛行訓練の授業中に部屋に忍び込み、いろいろと調べようとしたようだな。

かんざつしーの方だけにしておけばいいものを。

俺のキャリーバッグを開けたのが運の尽きだ。

「……」

スヤスヤと眠る会長さんをかんざつしーのベッドへ移す。

代表であり当主であり生徒会長ともなれば、暇なのだろうか。

賢者の石に取り込んでもいいが、彼女の持つ専用機の処理が面倒だ。

今回は止めておこう。

既に主成分は分解されているはずだが、一応窓を開けて換気をする。

睡眠ガスが無くなってしまった。

また補充しなければならぬが、学園では作れない。

困ったな。

とりあえず外出届けを出しに行こう。

◇◇◇◇

外出届けだが、条件を出された。

一夏と模擬戦をすることだ。

それも剣一本で戦えというらしい。

「どうして俺に剣を使わせようとするのです？　オルコットとの戦闘では不十分ですか？」

「……弟の友人にこんなことは言いたくないが、お前はとても胡散臭い。

教官、教師としてそれなりにやってきた私だが、お前の考えていることは全く読めん。

だから行動から見極めるしかないのだ。

楯無の件もそうだ。

まあ、セリシアとの模擬戦で見せた剣は悪くなかった。

だがあいつでは力不足だ。

私が見極めたいところだが、せっかくなので男同士、全力を出して戦うといい」

剣は心を映す鏡、ってあの道場で言っていたな。

人間は見ないのだろうか。

「せめて短剣にしてくださいませんか？ 出来れば片刃の」

「……まあいいだろう」

これも外出のためだ。

万が一ダメだと言われても、N.O. 7とN.O. 18を使えばどうともなる。

一夏へは千冬さんが伝えるとのこと、一足先にアリーナへ向かう。

「酷い武器だ」

まさか廃棄予定の打鉄のブレードを刀で斬って、これを使えと渡されるとは思わなかった。

確かに短剣で片刃だけどさ。

こんな取り回しの悪い即興品を渡されるなら、素直に竹刀で打ち合っていた方が良かったかも知れない。

「何だか悪いな、無理やり連れてきたみたいで」

「気にするな。これくらいどうにでもなる」

試合開始のブザーが鳴る。

さあ、どこまでやれるかな。

◇◇◇◇

箒との訓練の成果なのか、それとも雪片式型のリーチや零落白夜への恐れからか、

中々踏み込めない。

何度が突きや斬撃を当てているが、相手の損害は微々たるものだ。

さすが元白騎士というべきか。

右から左への横薙ぎをスレスレで躲し、踏み込んで顔目掛けた刺突を放つ。

一夏が咄嗟に仰け反ったことで刃は届かない。

続けて刺突を放つと、体ごと後退していく。

間髪入れずに短剣を投げた。

「うおっ!？」

意表を突けたようだが、雪片式型で弾かれてしまう。

瞬間加速を使って弾かれた短剣を掴み取り、地面へ降りる。

仕切り直しだ。

「……凄いな。どこで教わったんだ？」

「説明書と呼んだのさ」

『詳しく』

だが断る。

無駄口を叩きながら、再度切り結ぶ。

まあ打ち合う訳じゃない。

一步後退したり、半身になったり、受け流して直撃を躲す。

千冬さんは刀身を斬つたが、柄には何もしていない。

短剣にしては長い柄が苛立ちを誘う。

そんな感情を乗せて突きを放つたのがいけなかった。

「そっだー」

しくじったか。

一夏は一撃貫うことを承知で、零落白夜を発動させて斬撃を放つ。

スラスターを使って白式を飛び越えるように飛翔するが、胴体を浅く雪片式型に斬られる。

随分多くエネルギーが持つて行かれたな。

直撃して全損するのも領ける。

『そっまでー！』

千冬さんの声が響き、試合終了のブザーがなる。

時間切れか。

いやあ、零落白夜は強敵ですね。

◇◇◇◇

外出許可が降りたのはいいが、面倒なことになった。

シルバークローズと俺は千冬さんのおかげで学園所属となっている。

だが、そう簡単に分かりましたと言えないのが世の常らしく、数多くの企業からうちに所属してくれ、という申請が来ているらしい。

俺がシルバークローズを受け取る前から、水面下で俺の専用機の開発をしていた企業も少なくないとか。

だが無意味だ。

整備を我が社で、という企業もいるらしい。

だが無意味だ。

整備なら俺一人で十分である、というか俺以外出来ない。

俺以外が近づくと球状に変化した装甲が機体を包み込んでしまつて、弄れるのはカスラムウイングぐらいだ。

人見知りな妹みたいと整備科の先輩が言っていたが、どちらかと言えば犬か猫の類だろう。

どちらにも懐かれたことはないし、チャットとはいえ、内面の一部を知っている身からすれば、可愛げなんてものは存在しない。

「どこかへ所属しない限り、お前は狙われることになるぞ。

IS学園とて一枚岩ではない。

稼働データを公開すればいくらかはマシになると思うが……」

模擬戦で何かを感じ取ったのか、千冬さんの態度がどこか柔らかい。

まあどうでもいいことだ。

今来てる申請の中で、一番悪質なところを教えてもらおう。

「……夢見工業だ。おそらく生徒に協力者がいるだろう」

明日のニュースが楽しみだな。

◇◇◇◇

「違うのよ簪ちゃん！ これは、その、有機君の正体を掴むというかなんというか」

「……」

「気がついたら眠っていたのよ！ 本当よ、本当なのよ信じて簪ちゃん！」

睡眠ガスは無色無臭で三分ほど時間を掛けて眠るように作られている。

暗部の人間なら三分もあれば異常を感知して逃げると思っていたのだが、意外だ。

さて、やはり会長さんとかんざっしーは姉妹らしい。

それにしても起きるのが早いな。

丸一日は寝たきりになるガスだったが、相手が暗部の人間となれば数時間しか持たな

いようだ。

当主ともなれば、毒物への抗体を持っていてもおかしくない。

かんざつしーの足にしがみつく先輩だが、冷たい視線を受けて泣きそうになっている。

無断で人のベッドを占領するからそうなるのだ。

しかも水着にエプロンという格好で。

蔑みを受けても仕方無い。

それにしてもどこか生暖かい目付きに見えるが。

「先にシャワー使ってもいいか？」

「……うん」

「待つて有機君！ あなたには謝罪と聞きたいことが——」

「私よりあの人がいいんだ」

「!? 違うのよ簪ちゃん！ これはお仕事、いや親睦くあwse d r f t g yふ——」

訓練の時もそうだったが、中々愉快な人だ。

脱衣所で端末を取り出し、No. 18とNo. 7へ追加任務を与える。

お土産よろしく。

◇◇◇◇

俺への勧誘が大幅に減ったらしい。

八つ橋美味しいです。

「国からの勧誘と自分達が誠実であると自覚しうる企業だけが残った、と千冬さんは言う。う。」

まあお断りだがね。

それより正当防衛の上限を教えてほしい。

「殺しはダメだ。五体満足で無力化するのが望ましい」

千冬さんは八つ橋を頬張りながらそう言った。

「無力化した数時間後に死んだ場合はどうなります?」

「……無力化した手段にもよるが、持病でもない限り過剰防衛になるだろう。なぜこ

んなことを聞く?」

「なんとなくですよ」

明日は晴れ時々殺人、なんてね。

◇◇◇◇

日曜日となり、モノレールに乗ってI S学園の外へ。

今頃、部屋中にバラ撒いたナノマシン群が各所に仕掛けられた隠しカメラや盗聴器を無力化させているだろう。

既に設置場所は特定してある。

かんざっしーのメガネに仕込まれたものを除けば、今日で片付くだろう。

歩きながら周囲を探ると、護衛とも監視とも言える人間が五人ほどいるのが分かる。ナイフやスタンガンなどを持った人間を見つけ次第、俺から遠ざけてくれているようだ。

そういうことしてるから俺を見失うんだがね。

工事中と描かれた看板とカラーコーンに囲まれているマンホールから下水道へと降り立ち、No. 18に用意させた睡眠ガス発生装置や重金属刃、ラボにて生成したシルバークロウズの予備装甲などを拡張領域へ仕舞っていく。

『これはいいものだ』

ISコアにもこれの素晴らしさが分かるようだ。

消臭用のナノマシンを使い、外へと戻って衣料品を買い漁っていると、何やら女性に絡まれた。

「これ運びなさい！ 男でしょー！」

ちようどカメラの死角だったので、左手で首を引っ掴み、右手で口を塞ぐ。

右手の平からブレードが飛び出し、女の前歯を粉砕しながら直進、喉へと突き刺さる。先端部からナノマシンが流れこんでいく。

スリーカウントで生体組織が水分とその他の成分に分離し、衣服と粉末が床へと落ちた。

ちよつと臭うので衣服の棚を崩して埋める。
ハンカチで手を拭っておくことも忘れない。

まあ服屋で服に埋もれて死ぬるのなら、店員としては本望だろう。

◇◇◇◇

モノレールを使い、IS学園へ戻る。

降りてすぐツインテール少女を見つけた。

既視感を覚え、訪ねてみるとなんと鳳鈴音とのこと。

中国代表候補生として転入するらしい。

「あんた変わった？　なんか表情が読めないわね」

「無表情ではないはずだが？」

「そうなんだけど……なんか笑ってるけど笑ってないみたいな感じ」

「ああ、しばらく前に顔の筋肉を一新したからな。表情筋が前ほど馴染んでないんだろう」

「あはは！　あんたにしては面白い冗談ね！」

◇◇◇◇

翌日。

鈴の転入は割と噂になっているようで、それは一組も例外ではない。

そこへ颯爽と現れる時の人、鳳鈴音。

昨日聞いていたが、二組の代表になったことを表明し、一夏へ宣戦布告をしている。それを一夏に似合わないと言われて素に戻るあたり、変わらず単純な奴だ。

食い下がる鈴だったが、千冬さんに頭を叩かれ、退散してく。

S H Rの始まりだ。

◇◇◇◇

食堂にてカレーうどんを食べる。

カレーラーメンにしなさいよ、と鈴に言われたが俺はうどんの方がいい。

ラーメンの具とカレーは合わない。

完全論破した俺は空いている席へ向かう。

鈴はラーメンの乗ったお盆を持ったまま一夏達を待つらしい。

恋心は伸びたラーメンさえも受け入れるというのか。

俺が席に着くと、ちょうど一夏達が食堂へと来て鈴と合流したようだ。

そのまま近くのテーブルに座り、あつという間に修羅場が作り出される。

誰が一夏にI Sを教えるか、という話らしい。

モテる男は辛いね。

俺なんかは専用機のお蔭で勝ったとか、オルコットの弱みを握っていたとか、そう

いう陰口ばかりだぜ。

そういう奴らには、俺に代わってN o. 18とN o. 7がお仕置きよ。

親族共は死体すら残るまい。

二人には仕事を与え過ぎかな？

まあその日のノルマさえ終えれば好きに観光なり休むなり言つてあるし、バイタルに異常はないから大丈夫だと思うが。

そんなことを考えていると、一夏がおもむろにお盆を持つて席を立ち、俺の座つているテーブルへ来た。

「どうした？」

「どうしたもこうしたもあるか……最近付き合ひ悪いぜ？」

「どうか助けてくれ」

「一人選べば済む話だろう」

「選ぶつて……でもなあ」

「ちよつと一夏！　せめて一言言つてから立つてよ！」

「そうですわよ！」

「そうだぞ一夏！」

三人が追いついてきた。

まあすぐそこだし当然か。

「待って、落ち着けて。」

有機だつて友達なんだ、一緒に食べたつていいだろ？」

「……まあ鬼道なら」

「むしろ一緒ではないことに驚きですわ」

「自分から混ざらないのは変わつてないわね」

騒がしい食事は嫌いなんだけどな。

食事は、なんていうか。

そう、誰にも邪魔されず、自由じゃなきゃいけないのだよ。

まあ手遅れみたいだが。

「俺のことは気にしなくていい。」

で、一夏は誰にするんだ？」

「いや、皆で訓練すればいいだろ？」

「私一人で十分だ！」

「あたし一人で十分よ、この二人より強いしね！」

「……」

箒と鈴同様反論すると思つていたオルコットだが、何やら考え込んでいる様子だ。

「セシリア？ セシリアはいいのか？」

一夏がそう聞くと、オルコットは顔を上げた。

「いえ、遠距離武器への対応は——私より有機さんの方が適役かも知れませんが、もちろん、私も協力は惜しみませんが」

「有機が？……ああ、そういうえば全然当たってなかったな。」

コツでもあるのか？」

「あたしも試合映像見たわよ。」

あれどうなってるのよ」

「……私も不可解に思っていた。」

専用機とはいえ、乗って間もない機体でああも簡単に躲せるものなのか？」

生身で出来ることはISでも出来る。

が、生身で銃弾が躲けるといっても信じないだろうな。

となると……理攻めか。

「理論上のことを言うなら、射線と射手の視線、射撃姿勢を崩すのが重要だな。」

ISのハイパーセンサーを使えば、理論上は三百六十度に狙いを付けることが出来るが、それで動く相手に当てられるかと言えば難しい。

その辺はオルコットが詳しいだろう」

「ええ、両目で捉えて、射撃姿勢を保ちながら撃つのが一番命中率が高いですわね」
「このように、ISは機械としては優秀だが人間が追いつけていない。」

付け込む隙はそこにある」

「へえ、有機は理論派なのね」

「視線っていうのは分かりやすいな」

「一理あるが、あの空中起動は一体どうやって……白兵戦闘は文句無しだが」

「言ってることは正しいのですが、どこか納得出来ませんわね」

四人は三者三様の反応を見せる。

一部疑惑の芽が芽吹いているのは少々頂けないが、俺は一応とはいえ数少ない男のI

S適合者だ。

まともじゃないのは周知の事実。

受け入れられるかは時間が解決してくれるだろう。

「有機も訓練に付き合ってくれよ」

「暇だったらな」

手早くカレーうどんを完食し、残っていた水を飲み干してお盆を手を席を立った。

そんな俺を見た後に時計を見て、四人が慌てて昼食を食べ始める

時間は有限だ。



重金属刃の実験がしたいが、生半可な施設では甚大な被害が予想される。

ISを穴だらけにするために作った装備だから、IS学園で使うこと自体間違いとも言えるが。

この学園の整備室、実験室の強度では耐えられまい。

予備の重金属刃を人間が持つようにデチューンし、シルバークローズの拡張領域に入れておくとしよう。

整備室のログを消して置くことも忘れない。

まあ素材の希少さから情報が漏れたところで作れるかどうかは疑問だが。

さて、これでISが使えないような閉鎖空間でも何とか戦えるだろう。

計算通りの威力なら一撃で建物が崩れるがね。

興味を持ったかんざつしーに、自衛目的ならISで十分では？と聞かれたので、懇切

丁寧はこの重金属刃の素晴らしさを語る。

「こいつの比重は鉛の3倍、硬度と弾性を最高のレベルで両立した、

重金属のチューブ構造結晶の刀身を持っている。

刃の代わりにこれまたスペシャルな重金属が貼り付けてあり、

衝撃で爆発し1000℃を超える熱と針状の結晶破片を斬撃の軌道上に飛散させ、

当たりさえすれば刀身の長さを超えて対象を2つに斬ることが可能だ。

絶対防衛はもちろんのこと、

宇宙衛星やスペースシャトルなら両断は出来ずとも穴だらけに出来るだろう。

どんな名刀も使い手が未熟ではナマクラとかいうが、

俺からすれば人が刀に合わせることに自體愚かなことだ。

人が刀に合わせるのではない。

刀を人に合わせるのだ。

この刀に求められるのは刃を当てることだけ、まさしく究極の刀というわけだ。

この優れた元素達をナノマシンで繋ぎ合わせた一品、言うなれば星の刃と言える。

スターブレード！

いい響きだ」

いくつか理解出来るところがあるのか、かんざつしーの目が光る。

高周波ブレードの魅力を語ってきた。

あれはいいものだ。

ほう、ライトセイバー？

映像資料もある？

それは楽しみだ。



饒舌を披露したことで喉が乾いたので自販機へ向かう。すると目を腫らした鈴が一夏の部屋から出てきた。

昼はあんなに賑やかだったのに、落ちるのが早いな。

まあセカンド扱いじゃ険悪にもなるのも仕方あるまい。

俺も旧型、二番手とNo. 3 にからかわれることがあった。

だからぶつ殺したんだが……鈴が一夏を殺すなんてことはまずありえんだろ。うな。愛があると殺せなくなるのか、面倒だな。

「有機……ごめん、ちょっと愚痴聞いて」

「だが断る」

なんでよー！と言つて追つてくる鈴が聞いてもいないのに愚痴を吐き出していく。

やはり酔豚だったか。

弾が一応伝えていたはずだが、奢る方に曲解するとはな。

奢つてもらった飯ほど不味いものはない。

「……あんなに頑張つてきたのに。学園まで来て……」

粗方愚痴を吐き出すと、今度は悲しみが表に出てくる。

お涙頂戴は天然もの同士でやって欲しいものだ。

人工的に培養された俺には荷が重い。

約束自体は覚えていてもらったことを思い出したのか、鈴は気持ちを切り替えた。あの時、一夏が耳にイヤホンを差していたことは話さない方がいいな。

「聞いてもらってスッキリしたわ、ありがとう！ またね！」
次はない方がいいんだがな。



No. 18とNo. 7の任務が完了したようだ。

あの二人はドラマやマンガと違って対象を取り逃がすということがない。

一度の襲撃で必ず殺し、形跡を残さず撤退しているから、二人の情報が拡散せず、スムーズに事が運んだのだろう。

特にNo. 7の監視カメラへの工作や目撃者の始末などには目を見張るものがある。

後天的に身につけたものだと思うが、一体どこで……映画だと？

ハリウッドも馬鹿に出来んな。

さて、新しい戸籍とのかな田舎に新居を用意してある。

そこでのんびり過ごすといい。▪

まあ数十人の役人を消す為に数百人を殺したのだから、事件そのものは残り、これからも調査や警戒がされるだろう。

やがてはあの二人や俺という人物に辿り着くかも知れないが、その時は日本をドンパチ賑やか盛り上げてやればいいさ。

男が乗れるISレベルの兵器をばら撒くつてもいいかも知れんな。

◇◇◇◇

クラス対抗戦が始まった。

一夏対鈴という、どこか悪意めいたものを感じる第一試合だ。

アリーナの観客席には満員という程ではないが、それなりに来賓が詰めかけている。

こいつらを一扫した時、世の中にどれくらい混乱を引き起こすことが出来るのだろうか。

まあ大した結果にはなるまい。

どうせやるならもっとド派手にやるべきだ。

国連会議とかな。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「そんなのいらねえよ。全力で来い」

オーブンチャンネルで二人の会話が聞こえてくる。

ISの絶対防御も完璧じゃない、だって？

そんなのは周知の事実だ。

試合開始のブザーが鳴り、二人は動き出す。

双方の武器がぶつかり合う。

距離を取ったところで一夏君吹っ飛ばされたー！

おや、形態端末にシルバークローズからのメールだ。中身は鈴の機体について。

あの機体は甲龍というらしい。

燃費と安定性を重視、か。

夢のない機体だな。

だが見えない砲撃というのは中々面白い。

攻めあぐねていた一夏だが、ふと何かを思い出したような仕草をした途端、砲撃を躲し始めた。

まあ視線の先に砲撃が来ると分かれば、躲すのは簡単だ。

一夏は本気を出すと宣言し、瞬間加速で甲竜へ迫る。

とりあえず零落白夜を当てれば勝ちが見える、そういう戦況を常とする一夏と戦うのはそれなりのプレッシャーがある。

約束がどうかで感情がごっちゃごっちゃの鈴にはきつい相手だろうな。

おや、またシルバークローズから着信だ。

『警告、衝撃にそななn』

何やら手元が狂ったようなメールが来たなと思ったら、文字通りアリーナに大きな衝撃が走る。

遮断シールドをぶち抜くほどのレーザー、束さんだな。

おっとまた着信だ。

『無人機の先制攻撃だべ！』

当たってないぜ束さん。

だが楽しそうで何より。

生徒達が耳鳴りのしそうな甲高い悲鳴を上げ、我先にと出口へと殺到する。

席が空いたので、最前列へと向かう。

「ダメだよゆっきー！ 逃げなちゃー！」

袖を余らせた生徒が俺を引き止める。

感動的だな、だが無意味だ。

逃げる気が無いのに逃げす為にと動かとかマジナンセンス。

誰かの食べかけのポップコーンを拾い、最前席へ向かう。

ブラックペツパーか、いいセンスだ。

無人機がこちらに砲門を向けてきた。

お前もブラックペツパーの良さが分かるようだな。

放たれたレーザーを跳躍して躲す。

席から席へと跳び跳ねるのは中々爽快だ。

足場にした席が蒸発していく。

さすがは兎印のレーザーといったところか。

数年前に足を取り替えていなかったら避けられなかっただろうな。

何やら箒が叫んでいるようだが、忙しくてよく分からない。

『すまん有機！ そのまま引き付けてくれ！』

一夏からのプライベート通信がかかって来た。

通信は出来るのにチャットが出来ないというのは少々残念だな。

それに引きつけているつもりは無く、間接的な束さんとのスキンシップみたいなもの
なんだが。

無人機は龍砲を使って加速した一夏に切り伏せられ、活動を停止、爆発した。

巻き込まれた一夏がぶっ飛んでいるが、まあ大丈夫だろう。

負けたら爆発。

さすがは束さん、様式美を分かってらっしゃる。

◇◇◇◇

クラス対抗戦は中止になった。

負傷した一夏は英雄！

共闘した鈴も英雄！

叫んだ筈はヒロイン！

無人機の注意を引きつけた俺は変人。

そういう認識が広まっているらしい。

事情聴取を受けた際、人外めいた身体能力を追求されたが、千冬さんを例にして押し切った。

同じこと出来る人間がいるのに、俺だけ妙な扱いをされるのはおかしい。

天然ものの人間と俺とでこんなにも思いが違うとは思わなかったよ。

スタントマンだっけと一緒と同じことが出来るぜ。

◇◇◇◇

シャワーを浴びていると、急に目がおかしくなった。

視えない。

真っ暗だ。

体内の余剰ナノマシンを目に集中させて、ようやく見えるようになった。

安心したのも束の間、目眩が襲ってきた。

そして吐血！

なんてことだ。

体内のナノマシン群を使って体を調べてみると、どうも胃に異常があるようだ。

潰瘍している部分があるな。

割と万能なナノマシンだが胃を治すのは難しい。

ナノマシンは胃酸に対して無力なのだ。

粘液の分泌量を増やしたり、消耗するのを承知で粘膜代わりに使うしかない。

いつそ胃を取り換えるか……考えておこう。

しかし、目と胃が同時に機能不全とはな。

シルバークローズの生体維持機能も、劣化までは止められないのか。

ここ数年は劣化も無かったから、もしやと思っていたが……。

今や俺に残された生体組織は、ナノマシン集合体で作られた部位より少ないのかも知れない。

束さんが悲しまなければいいが。

かんざつしーが俺の目を見て驚いている。

どうしたのか聞いてみると銀色らしい。

余剰ナノマシンの輝きだな。

ちよつとした遊び心で、目を光らせてみる。

かんざつしーが怯みを見せた。

「くっ、凄まじいパワーを感じる」

実際は0+ナノマシンなんですけどね。
さて、どうしたものか。

◇◇◇◇

「ゆうくんおひさー」

二度目の夢に現れた機械仕掛の兎さん。

これは運命ですか？

「必然ですぜー！」

またも電脳世界へ引きこまれたらしい。

無人機壊れちゃって残念でしたね。

「あれは使い捨てみたいなものだから問題ないよ！

こっちも迷惑掛けちゃってごめんね。

ゴーレムがゆうくんのことを敵性兵器と認識しちゃったみたいだね。

止めようと思ったんだけど、

まさかISを使わずに躲し続けるとは思わなかったから見入っちゃったよ。

いつくんもゆうくんも恰好良かった！」

直線的な射撃を躲すだけならISは必要ない。

というか躲せなかったら俺もう死んでるからな。

あの時殺しといて良かったぜ本当。

「ところでゆうくん、体は大丈夫？」

ついさつき視力を失いましたぜ。

「え？」

そして血を吐いた。

「——そんな馬鹿な！」

シルバークローズにはゆうくん用に調整した常時発動型の生体維持機能があつたはず！

ここに来ている時点で同期だつて完璧なはず！ どうして!？」

テロメアがやばいんだよね。

健全なテロメアを新品のポツキーに例えるのなら、俺のテロメアにチョコなどない。

受精卵の状態から三週間で五歳児レベルまで急速成長した反動なのだろう。

結局のところ寿命つてやつ？

「ダメだよゆうくん、諦めたら！」

東さんは諦めないよ、ゆうくんには長生きしてもらうんだから！」

東さんは優しいな。

「そう思ってくれるのはゆうくんとかーちゃん、

いっくんにちーちゃん……いやちーちゃんは違うか。

箒ちゃんは……箒ちゃん……箒ちゃん！」

いつの間にやら現れた夕日に叫ぶ東さん。

その後ろ姿はどことなく哀愁を誘う。

「とにかくゆーくん、待っていてね！」

必ず助けてみせる！」

とか言っておきながら手に持つてるのは何ですか？

「ふふふ、今回は体調が悪いみたいだから見逃してやろうサトシ、いやシルバー！」

だが忘れるな！

私のスピーカーにはがむしゃらと電光石火、そして気合のタスキがあることを！」

マジかよ、俺のポツポと同じ構成じゃないか。

◇◇◇◇

見える、見えるぞ！

どうやら感度は良好なようだ。

ISに合わせたナノマシンが俺に適應するか不安だったが、こうしてみると冒険して

みて正解だったな。

さすがはドイツの科学力だ。

常時発動していると目への負担が大きく、視力を失うらしいが、ナノマシンに慣れている俺にとって出力を調整することなど容易いことだ。

そんな俺の金眼デビューは無人机との大立ち回りもあつてか、中々好評なようだ。レーザーで目をやられた、という設定も中々受けている。

まあ半数以上は冗談だと分かつているようだがな。

レーザーがああ距離で拡散する訳ない。

「諸君、おはよう」

織斑先生の登場で教室が静まり、皆が席に着く音が聞こえる。

今日からは本格的な実践訓練をするらしい。

「それでは山田先生、ホームルームを」

「は、はい！」

織斑先生の話が終わり、ホームルームが始まる。

「今日は転校生を紹介します！しかも二名です！」

クラスメイト達がざわつき始めたが、転校生が入ってきたことで静かになる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。」

この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく願います」

中性的な顔立ちで鮮やかな金髪を後ろで束ねた転校生だ。

情報にあったバストがないように見える……制服の下に細工をしているのか。

間を置いてクラスメイト達の歓喜の叫びが上がり、十秒程続いたそれを織斑先生が静めた。

似たような顔をした生徒なら、他の組や先輩達の中にいるだろうに。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「了解しました、教官」

続けて自己紹介をするのはドイツ産の強化遺伝子試験体のラウラ・ボーデヴィツヒだ。

織斑先生を教官と呼び、従っている。

それ以外はどうでもいい、といった様子だ。

「ぶべっ」

乾いた音と重なるようにして、一夏がマヌケな声を上げた、

ラウラに叩かれたのだ。

「私は認めない。貴様があの人の弟であることなど認めるものか！」

そう言い放ち、ラウラは次に俺の方を向いた。

赤い右目を大きく見開いている。

それが何を意味するかはよく分かる。

俺の両目が羨ましいのだろう。

「貴様、その目はッ」

「ふふふ。」

俺の、何だつて？」

「――座れ、ラウラ」

「ハイ、教官！」

ラウラは何か言うより早く、千冬さんに命じられて彼女は去っていった。

千冬さんの命令には絶対なようだ。

まるで犬だな。

首輪はされていないようだが。

まあこのサイズなら問題ないだろう。

◇◇◇◇

トラブルはあつたものの、ホームルームは終わった。

一夏が頬を抑えていることを除けば、だ。

「織斑、それと鬼ど……あー、いやなんでもない。デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子
だろう」

なんで俺の方を向くんですかね。

まあ仕事が無いに越したことはない。

「有機、一緒に行こうぜ」

「だが断る。俺はもう下に着ているからな。制服を量子化すればそれで終わりさ」

「いや、でも数少ない男子だぜ?」

「悪いが妖精の相手をする気はない。　奴らは嘔吐きだから……二人で仲良くやってな」

「あ、おい!」

立ち去る際、シャルルの顔が青ざめているが見えた。

妖精云々が通じなかつたら恥ずかしかったが、どうやら通じたようだ。

最近でははつきり女性、男性と描写されがちだからな。

光球に羽ぐらいが丁度いい。

さて、俺は政治に興味はない。

データが欲しければ一夏だけにしておけ、とラファールに送っておこう。

もつとも、シルバークローズは俺の体と同じで、検査やハッキングに対して偽の情報を送るように設定されている。

おまけに俺以外の整備を受け付けけない。

まともなデータが取れるとは思えないけどね。

ああ、全身のレントゲンだけは勘弁な。

右腕のブレードが映つちまう。

◇◇◇◇

ラファール・リヴァイヴが構えるグレネードランチャーから放たれた榴弾が、鈴とオ
ルコットを吹き飛ばした。

元代表候補生というだけあって、山田先生の練度は高い。

専用機持ちが撃墜されたのを見て、多くの生徒たちが呆然としている。

機体のスペックだけが全てではない。

そういうことを教えるための模擬戦なのだろう。

それにしたって二人の連携は酷かったな。

『全くお笑いですな』

おっとシルバークローズも苦笑している。

まあ俺も二人の立場であれば連携なんてしないだろうがね。

「では専用機持ちをリーダーに、分かれて実習を行う。速やかに移動しろ」

千冬さんの指示を受けて、生徒達がそれぞれの専用機持ちのもとへ向かう。

「ゆっきーよろしく〜」

「よ、よろしくお願ひします」

どうも気弱そうな女子集団が俺の元へ集まってきた。

まあ強気だったり活発な女子は一夏やデユノアに向かうからな。

こうなるのもある意味当然か。

「馬鹿どもが！ 出席番号順に一人ずつ班に入れ！ これ以上もたつくのならば延々と走らせるぞ！」

千冬さんの怒鳴り声を受け、女子生徒達が慌てて並び直していく。

ある者は喜び、ある者は落胆している。

『無常なり』

さて、実習の始まりだ。

一人ずつ打鉄を使って装着、起動、歩行をさせる。

もたつく生徒がいたので、俺なりのアドバイスをする。

「目を閉じて十頭身になった自分をイメージしろ。さあ歩け」

「……歩けたけど何だか釈然としない」

「それがISだ十頭身」

「私は十頭身って名前じゃないわよー！」

ノリが良くて結構。



午後からは午前に仕様したISの整備実習の時間だ。

整備といっても、これといった損傷もなく、バラしてまた組み立てるようなものだが。

まあ気負う必要は全くない。

無理に職人になろうとなんてしなくてもいい。

マニュアルを見ながらどこにどの部品を使うのか確認しながら作業をすれば、整備なんてものは誰にでも出来る。

不器用だというのなら、マニピュレーターとAIに指示だけ出していればいい。

そういう説明をすると、実習というから夜更かしして勉強したのが馬鹿馬鹿しくなつたように、

女子生徒達は和気藹々と整備に取り掛かっていく。

これが自主性の尊重というやつだ。

ドイツの方も似たようなことをやってる。

放任っぽく見えなくもないが。

まああのISに仕込まれているものを考えてみれば、他人と関わりたくないというのも頷ける。

「さすがですな教官」

「……何が言いたい」

「教え子なのでしよう？ あの欠陥品……いや、兵器か。

先生もモノ好きですね」

「あれは人間だ。お前だって人間だ。それを間違えるな」
本当に人間ならここでお涙だぜ。

午前の授業が終わり、昼休みになると一夏に昼飯を誘われた。

シャルルの歓迎会も兼ねているらしい。

「ほう、妖精が何を食べるか興味が湧いてきたぞ」

「まだ言ってるのか？　とういかなんで妖精？」

「待つて一夏！　いいんだよ！　僕はいいんだ、気にしてないから！」

箒、鈴、セリシアと合流し、屋上へ向かう。

イメージしていたカビと鳥の糞だらけの屋上と違い、清潔感溢れる庭園めいた場所となっていた。

これの管理は大変だろうな。

箒が弁当を広げ、鈴がタッパーを取り出し、セリシアはバスケットをあざとく掲げる。

この三点が作り出すトライアングルに一夏は囚われてしまった。

可哀想に、善意で包囲されるとは。

銃口を向けられるより辛いだろうな。

「有機君、それで足りるの？」

購買のパンを順調に食べ進めていると、シャルルが声を掛けてきた。

俺の体は機械組織が増えたせいで、ぶつちやけもう生体組織から作るエネルギーだけでは足りない状況にある。

結果、特定の有機物を賢者の石を介して分解、抽出、合成して作ったエネルギーパツクを一日二回摂取する必要があるのだ。

逆に言えば、それさえ摂取していれば食事の量は問題にならない。

例えコツペパン一個だとしてもだ。

胃を休ませる必要がある。

「ああ足りるとも。むしろシャルル君は思ってたより食べるようだね。」

その細さからして、食事制限でも掛けているのかと思っていたよ」

「あはは、それはさすがに辛いというか無理だよ。」

それにまだまだ成長期だからね。

ちやんと食べなきゃ大きくなれないよ」

「これ以上大きくなるのか？ それでは胸が苦しくなるな」

「む、胸っ!? あ、いや、そうだね。服のサイズとか大変だね」

「……ブラジャ」

「しや、シャツとかね！ 胸板とか憧れちゃうよ！」

胸筋を鍛えるとバストアップにもなる、とは言わないでおこう。
ちようど鈴がこちらへ向かってきた。

「ほら、有機にもあげるわ。パンだけじゃ力が出ないわよ」

「残念だが箸がないで遠慮するよ」

「じゃああたしの使いなさいよ」

「間接キスで一夏に嫉妬でもさせるつもりか？」

やめておけ、男はベロチュー以外には振り向かん」

「べ、ベロチューってあんた。」

そういうことを言うのならもう少し顔に出しなさいよ。

この前の実習で何も感じなかった訳？」

「俺が性欲を感じるとしたら特殊な薬品が必要になるな。」

そういう風に出来ている」

「……自分を物みたいに言うのは変わってないのね。」

ほら、あたしは気にしないからちやちやと食べなさい」

「では遠慮無く」

白飯に合いそうな味付けだ。

むしろ白飯がないと濃すぎるな。

白飯を用意すると尚良と伝える。

「あー、やつぱりそうよね。ありがと、参考になったわ！」

「ぐああああ！」

「一夏!？」

想い人の悲鳴を聞いて、鈴が一夏の元へと向かう。

原因はセリシアのサンドイツチか。

手間の掛からないサンドイツチが不味く出来るということは、そこに確かな悪意がある。

暗殺指令でも受けて毒でも盛ったのかな？

まあ一夏には飲むナノマシンプルーベリー味を渡してある。

そう簡単には死なないさ。

「………凄いな」

「ああ凄まじい。凄まじい悪意だ」

「あ、そつちじゃなくて、いやそつちも凄いなんだけど、鈴とのやり取りがだよ」

「鈴との？」

「うん。なんか親友って感じがして。」

女と男の友情って成立しないと思ってたんだけどね」

「親友、か」

それこそ男の女の友情と同じぐらい成立しないと思うけどな。

おっとシルバークローズからメールだ。

『同意』

お前には同意して欲しくなかったな。

◇◇◇◇

放課後。

一夏に誘われて、アリーナへ向かう。

正直腹、というか胃が凄く痛いので動きたくないが、診察されて病院に輸送されたら非常に面倒だ。

痛覚を断れば気にならないが、それでは胃の状態が分からなくなる。

今日は耐えるしかない。

「何故こんなところで教師など！」

廊下を歩いていると、何やらドイツ軍人の声が聞こえてきた。

話からして、千冬さんにまたドイツで教官をやって欲しいようだ。

となると俺が通り抜けても問題ないな。

俺の問題じゃないし。

「この生徒はISをファクションかなにかと勘違いしている。

そのような程度の低い者たちに教官が時間を——」

「そこまでしておけよ、小娘」

千冬さんの睨みつけるは、攻撃力どころか素早さまでガクツと下げるからな。

後に響くぜ。

「生まれ鬼道」

ラウラの後ろを通り抜けようとすると呼び止められる。

二段階下がった素早さでは逃げ切るのは無理か。

「約束があるんですが」

「いいから生まれ……ラウラ、お前はいつの間に随分と偉くなったな。十五歳で選ば

れた人間気取りとは笑わせる」

「わ、私は……」

ラウラ越しに、千冬さんから目を通じて何やら伝わってくる。

まあ意味なんて分からんが。

シルバークローズの拡張領域内にて死蔵していたウサミミを取り出し、ラウラの頭に

乗せてみる。

消沈気味に俯いているラウラはそれに気がつかない。

目の前で見ていた千冬さんは、口元を引き攣らせている。

「うっ、ふくくっ」

見た目からはイメージ出来ない声が漏れている。

以前一夏が言っていた、日常生活ではズボラというのも間違いいではないのかも知れない。

「しかし教官、私は、うっ?!」

ラウラが顔を上げた瞬間、凜々しい顔へと戻るのはさすがといったところか。

だが、揺れたウサミミを見てくわっと目が見開いている。

それに気圧されたように怯むラウラ・ボーデヴィツヒ。

その動きに連動して揺れるウサミミ。

崩壊していく千冬フェイス。

ウサミミにこんな効果があったとは驚きだ。

結構やばい感じに引き攣った千冬さんの笑顔を見て、ラウラはそこに本気の怒りとやらでもイメージしたのか、逃げるようにその場を去った。

「……………」

が、数歩進んで頭部の違和感に気がついたのか、ラウラが立ち止まる。

俺は逃げた。

千冬さんも逃げた。

アリーナで叱られることになったが、何かを思い出してニヤニヤしていると一夏が指摘したことで千冬さんが抜刀。

白式と生身で打ち合うとは。

さすが世界最強だ。

あの動きは脳にインストールしても再現出来ないだろうな。

せつかくアリーナまで来たので、ISを展開する。

変化させた装甲を使って擬似的なワイヤーブレードとして操作する。

これが中々面白い。

しばし楽しんでいると、ブルーティーズが降下してきた。

「……有機さん、少しよろしいかしら」

「おやおルコツトさん。どうかしたのか?」

「さ、さん? 呼び捨てて貰って構いませんわ。私に勝ったのですから」

「自分を敗者と思っているのなら、勝者にどうこう言うのはおかしいなあ、おルコツトさん」

「くっ、的確に私のプライドを刺激しますわね。ですが乗りませんよ」

「おやおや、それでは祖国の民衆に示しが付かないな」

「ふ、ふふふ。 乗りませんよ、 乗りませんよ挑発には！」

「で、結局何の用だ？」

「……実は——」

偏光射撃についての相談だった。

シルバークローズはレーザーとは無縁の機体だが、装甲の変化が偏光に繋がるものがあれば、と思つてのことらしい。

情報によれば、ブルーティアーズの偏光射撃は最大稼働時に可能とされるようだ。

これはオルコットも分かっていることだろう。

「余り言い触らさないで欲しいことだが、この装甲はナノマシンと金属の合金で出来ている。」

ナノマシン操作に慣れた俺だからこそ、スムーズな変化が出来るようなものだ」

「ナノマシンを……もしや何か持病がお有りですか？」

「体の半分以上がナノマシンと言ったら信じるか？」

「さすがにそれは……いえ、もしそうだとしても、私は驚きませんわ」

「まあそんなことはどうでもいい。」

このISの稼働率はPICやスラスター以外にナノマシン操作によって変動する。

同様に、ブルーティアーズの稼働率もピット操作や射撃によって変動するはずだ。

必ずしも命中させることが全てではないだろう。

偏光すれば当たるような射撃、偏光すればより有効な牽制になるような射撃等々。

まあこの辺りは俺が言うまでも無く、分かっていることだと思いがね」

「そうですね……ですが、勝者からの肯定というのは心強いものですわ。

やる気が出てきましたわよ！」

そう言つて、ブルーティアーズは飛び去っていった。

ワンテンポ遅れてシルバークローズへ送られてきた感謝のメッセージを思念操作で

削除する。

勝者から肯定、か。

俺の知る肯定は実験成功を意味するものだ。

敗者は処分される。

それだけのこと。

君達は恵まれているな。

失敗しても、死なないのだから。

◇◇◇◇

自室へ戻る道中、一夏から通信が掛かって来た。

部屋に呼ばれたのでそこへ向かう。

デュノアと同部屋になったと聞いたが、ボロでも出したのか？
入室すると毛布で体を隠したデュノアがいた。

「あの三人を呼びたくなってきたな」

「待ってくれ有機！ そんな恐ろしいことを言わないでくれ！」

一応、修羅場を想像することは出来るみたいだな。

問題はそうなるにも気がつかないことか。

「それで、俺を呼んだのは何の用だ？」

「ああ、実は、その、落ち着いて聞いて欲しいんだが——」

「いいんだよ一夏、多分有機君はもう気づいている」

「そうなのか？」

「ああそうだ。そいつが女の体に男の心を持っているという話だろう？」

「ちよ、違うよ！ 僕、いや私は女の子だよ！」

「そうやって自分を抑えるのはさぞかし辛かっただろう。」

大丈夫だ、そういう女性の団体が世の中には幾つもある。

きつと優しく受け入れてくれるさ」

「い、一夏あ……一夏は信じてくれるよね？ 僕女の子だよね？」

「あ、ああもちろんだ。俺は信じる」

見つめ合う二人。

俺はしばし間を置いてから拍手をした。

我に返って赤くなる二人、青春だね。

「それで本題は？ ああ、昼ドラチックな中身なら話す必要はない。

二度手間だからな。何をしたいのかハッキリ言え」

一夏は学園の特記事項を使うつもりらしい。

原則的に外的介入が許可されない環境を利用し、学生の内は安全だという案だ。

「碌でもない親のために不幸になる必要なんてない！ ここにいる、シャルロット！」

よくまあそういう文面が思いつくものだ。

姉と二人で生きて来ただけあるというものか。

シャルロットの方も嬉しそうだ。

一夏が言葉を付け足していく。

俺にデュノアの正体がバレないよう協力して欲しいとのこと。

「結局のところ現状維持か。それで満足か？」

「満足っていうか……俺にはこれぐらいしか思いつかなかった」

シャルロットの方へ視線を向けるが、これと言った意思表示はない。

一夏の案に賛成といったところか。

「個人の策が組織に通じることは少ない。

お前はデュノア社にＩＳ学園という組織で対抗することにしたが、それでは温い。

もつとシンプルで確実に猿でも分かる方法がある」

「それって一体？」

「焼き払うことだ」

◇◇◇◇

結局、一夏とシャルルから賛同を得ることは出来なかつた。

シャルルを救う話をしているのに、会社の人間も死なせたくないなどは贅沢な話だ。

ラボの主砲であり潜行の主軸とも言える、七連装回転式レーザー砲で蒸発させてしまえばそれで終わりだというのに。

悪は滅び、悲劇のヒロインが救われる。

ヒーローであるレーザー砲は無機物なので、面倒な後始末に関わることもない。

何の問題があるというのか。

いや、問題だらけなのは分かっている。

だがどうせ問題になるなら、派手なものを選びたいものだ。

まあ結局殺るんだけどな。

賛同が無いからと言って、止める理由にはならない。

殺るのが俺なら、殺ると決めるのもまた俺なのだ。

レーザー砲は使わんよ。

趣味で作ったドロイドが暴走して自爆するだけさ。

部屋へ戻ると、何やら神回がどうか興奮した様子でかんざつしーが特撮を勧めてくる。

タイミングが悪いな。

だがまあ、彼女に勧められたSF映画からドロイド制作の決めたのも確かだ。

今日は付き合うとしよう。

だがその前にドライヤーを改造して作った電磁波照射装置でいろいろ処理しないと
な。

俺の制服ならともかく、かんざつしーの制服に隠しカメラと盗聴器を仕掛けるとは。

IS学園の闇は深い。

◇◇◇

学年別トーナメントで優勝すると、一夏、またはデュノア、そして俺と付き合えるらしい。

まるで熱血青春系のマンガでありそうな話だ。

男口調のヒロインが勝負に勝ったら交際してくれだとか、勝ったらヒロインに告白する決意をするだとか。

そういうストーリーを想像していると、新聞部がコメントを求めてきた。

「俺の妻となる者は、この世のモノとは思えないおぞましきものを見るだろう」

「え、えー……」

「どうせ捏造するんだ。

こういう対応をされるのは慣れているだろう？」

そう言つて教室から追い出すと、袖を余らせた生徒——本音から鬼畜と言われる。

いいね。

語呂で選んだ鬼道という苗字も、鬼畜と言われると選んだ甲斐が合ったというものだ。

いくら機械寄りな人間だからとはいえ、起動有機は俺もどうかと思つていたし。

◇◇◇◇

食堂に向かっていると、シルバークローズからメールが来た。

『学年別トーナメントはタッグ戦になる模様』

そうか、タッグになるのか。

組みたい相手は特に居ないが、こういうのは一夏が苦勞しそうだな。

いや、今の状況だとシャルロットと組むのが一番有力か。

問題を先送りしている限り、二人の相互依存が無くなることはないだろう。そんな二人を救うため、根本的問題を爆破する。

俺って友情に厚かったんだな。

今なら道徳のテストで3ぐらいは取れそうだな。

ふと、足を止める。

廊下の先に、見慣れた集団が見えた。

箒が、オルコットが、鈴が、そしてシャルロットが一夏を中心に歩いている。

遠目に見ても騒がしそうにしているのが分かる。

平常運転だな。

いや、オルコットは一步引いた位置で、いつもより静かな様に見える。

シャルロットを警戒しているのか？

まあ箒と鈴が積極的過ぎるだけかも知れないが。

どちらにしても——そう、データ取りという側面があつたとしても、一人の男を国の代表候補三人とISの母の妹が囲むこの状況……マスコミが飛び付きそうな絵面だな。

混ざるべきではないと思ひ、踵を返した。

それにしても、何故俺の所には誰も来ないのか。

誠に遺憾である。

まあそうなったらそうなたで、また局を一つ消すことになっていただろうがね。No. 18とNo. 7が居ない今、出資者に脅迫状を送って親族を一人ずつ消していくのは難しい。

次からはレーザーを収束させて糸通し気分で消してみようかな。

斜めに照射しながら難いでビルをぶつ切りつても面白そうだ。

悲劇惨劇つてのは話題性があるからな。

「愚かな奴らだ」

背後から声が聞こえた。ラウラだ。

俺が足を止めないと分かると、やや小走りで後を追ってきた。

歩幅に差があるようだ。

エネルギーパックをケチるからこうなる。

「奴らには国の代表候補としての自覚がない。

言動が国の品格を貶めている。

ドイツ軍にあのような者がいれば、即座に除隊しているところだ」

「除隊では生温い。

新兵器の的にでもしてしまえ」

返答が意外だったのか、ラウラが目を見開くのが見える。

「……意外だな。」

奴らを庇うとばかり思っていたぞ」

「友人なのは確かだが、庇うほど入れ込んではいない。

それに俺がドイツ軍人なら言った通りにするだろう。

まあドイツ人の価値観など知らんがね」

「今のドイツはそこまで過激ではない。

だがまあ、身内を裁くのは簡単だ。

やろうと思えば出来る」

俺が歩くのを止めると、ラウラも合わせて立ち止まる。

適当に歩いていたせいか、周りには人氣が無い。

遠目に歩く生徒が見える程度だ。

「それで、結局何が言いたいんだ？

学生らしく陰口を楽しみたいなら他を当たるんだな」

「そんなつもりは毛頭ない。

聞きたいのはお前の目についてだ」

「やらんぞ。」

「これが無いと何も見えないからな」

「貰ったところで私にはもう無用なものだ。」

聞きたいのは入手先だ。

一体どこで手に入れたのだ？」

「自家製だ」

「……何？」

「ドイツにそういうナノマシンがあつたことは知っているし、

ちよつぱり電子的な覗きをして設計図や実験データを盗み見たことは認めよう。

だが丸パクリでは能がない。

稼働率の調整はもちろんのこと、発光機能に角膜保護、乱視矯正に視力の倍率調整の

他、

携帯端末とリンクしてモニターとしての機能を追加しておいた。

実に快適で助かっている。

ドイツ人の合理性にはいつも驚かされる」

「……にわかには信じ難いが、どうも嘘を吐いているようには見えんな。

道化か狂人という可能性もあるが」

「信じる必要は無い」

「いや、私は信じよう。」

個人でナノマシンを生産していることに思うところはあがあるが……今はいい。これを見てくれ」

そう言つて差し出されたのは、タッグトーナメントの申請書だった。

「話が早いな。」

発表はもう少し後かと思つていたが」

「やはり知つていたか。」

これは教官が渡してくれたのだ。

他の生徒と違つて、お前の実力は疑う余地がない。

少々悪ふざけが目立つが、許容範囲だ。

私と組め」

「くだらんな、このタッグトーナメントは祭りのようなものだ。」

まともに付き合う意味などない」

「それについては私も同意する。」

だが合法的に織斑一夏と戦うには、これが一番都合が良いのだ」

「温いな」

「……なんだと?」

「お前は軍の命令でここに来て、都合がいいから私念を晴らそうとしているようだが……」

無意識の内に、学園の秩序を優先する程度には学生として染まっているようだな。

一夏に何やら用があるよう見えたが、実際は大した用じやなさそうだな」

「——ふざけるな！」

試験管ベイビーとはいえ、女性が感情的になりやすいのは変わらないな。

ラウラの声はよく響く。

「あの男のせいで、教官の名誉は傷付けられたのだ！」

この怒りを、温いだなどとは言わせん！」

「ならば何故、手段を選んでいるのかね？」

軍属だからか？

それとも教官とやらの気を使ってるのか？

どちらにせよ他人を省みた行動というのは後手に回りやすいものだ。

デユノアがいい例だ。

お前が手段を選んでいる限り、いずれ奴と同類になりかねないぞ」

「私が、奴と、同類、だと？」

馬鹿な、ありえん」

「ならば勇気を示せ。」

「実にシンプルなことだ」

「知ったような口を、お前に、お前に私の何が分かる！」

「知らんな。」

「尻込みしているお前が間抜けなのだよ」

「……私とて許されるなら、とうの昔に仕掛けている！」

「それが温いというのだ。」

「どう転がっても問題になるのは分かり切ったことだ。」

「許される許されないの話ではない。」

「——それともお前は、人の目と前例が無いと戦えないのか？」

「つ、挑発には、乗らんぞー！」

「そういつて、ラウラは俺に指を突きつけてきた。」

「デュエルディスクが似合いそうなポーズだ。」

「まずはお前を教育してやる。」

「私と戦え、鬼道有機！」

「言っていることがイギリス人と同じだな。」

「これがEUの結末か。」

「私が勝てばペアを組め。

もし勝負から逃げるようなら、その目のことをバラすぞ」

バレたところで問題はないが、まあいい。

実験にはいい機会だ。

「いいだろう。だが、手続きは全部お前がやるんだぞ？」

「チツ、一々癪に障ることをっ！」

そう悪態を吐いて、ラウラは踵を返した。

果たして彼女にアリーナの予約が取れるのだろうか？

ちよつとした楽しみが出来たな。

◇◇◇◇

No. 18とNo. 7は、無事引越しが完了したようだ。

さつそくご近所とも仲良くなったようで、いろいろと助けられているようだ。

随分と人間らしいな。

人間ではないくせに。

細菌兵器に適応した二人は劣化することがない。

ワクチンでは細菌を中和することは出来ても、細胞を活性化させることが出来ないの

だ。

「やってられんな」

便器に溜まった血を見て、思わずそう呟いた。

胃潰瘍が広がってきた影響か、目眩と吐血の頻度が上がってきた。

かんざつしーにはバレていないが、本音つちいが怪訝な顔をして臭いを嗅いで来た。

消臭したとはいえ、吐息に含まれる血の臭いまでは消すことが出来ていないのだから。

——思い返してみれば、ここ最近はどうも言動が荒っぽくなっていった気がする。

言動に影響が出る程度には、ストレスを感じているようだ。

消費される体内のナノマシン量も日に日に増えてきている。

ナノマシンそのものは割と簡単に生成出来る。

だが一つの肉体が許容出来るナノマシンには限界があり、消費され排出されるナノマシンの量がそれに近づきつつある。

まだまだ余裕はあるが、もし限界を超えるようなら——爆発オチを用意して置かなければな。



『……痛ましい事故を、お伝えいたします。

フランス、パリのレストランにて、爆発事故が発生しました。

店内に居た従業員、また客に、生存者はいない、とのことです』

爆☆殺。

ドロイドは無事任務を果たしたようだな。

昨日はトイレでちよつとしんみりしていたが、やっぱり人生こうでなければ。

まあ実際のところ、暇だから仕事を下さい、と連絡してきたNo. 7に遠隔操作させていたから、彼女の手柄のようなものだが。

再調整したことによって、爆破後は残骸が粉状になる。

しかも爆心地がキッチンともなれば、証拠は残るまい。

ハッキングによって監視カメラの映像も残っていないはずだ。

素晴らしい成果である。

報酬に伊達メガネを送ってやろう。

いつもと違う私、というのをN.O. 18にやってみるといい。

「おやっ？」

教室に入ると、何やら重たげな雰囲気を感じる。

机に突っ伏して泣きながら笑っているシャルロットの周りで、一夏と箒、オルコットがどうしたものかと立ち尽くしていた。

近くに居た本音に状況を教えてもらうと、

一夏が俯いたシャルルの手を引きながら入ってきて、席に座らせたはいいが、ずっとあの調子だという。

あれだな。

同じ様な泣き笑いって訳じゃないが、研究所を出た時のN.O. 18とN.O. 7に近いな。

諦めていたものが手に入った、とか言って涙を流していた。

自由を得て嬉しいのなら、何故俺に付いてきたのかはイマイチ理解出来ないが。

まあシャルロットもこれで自由だ。

良かったね。

「ゆっきー、どうして笑ってるの？」

「ふふ、友達が嬉しそうだと、つい笑っちゃうんだ」

「……」

「ところで、本音つちに聞きたいことがあるんだが」

「何々々？」

「最近、かんぎっしーの制服にゴミがよく付いているんだが、

男の俺では取るのも指摘するのも憚られる。

友人の君に頼みたいんだが、どうかな？」

「……うん、任せてよ」

◇◇◇◇

シャルロットがこの調子なので、傍にいてやるために一夏は訓練は休むという。

その際に意味有りげな視線を俺に向けてきたが、姉と同じでそういうのは理解不能だ。

言いたいことがあるなら、はつきり口にして欲しい。

もつとも、爆破はお前がやったのか、なんて言われたら困るんだけどね。

スマートな解決には爆薬が必要なのだよ。

一夏に合わせて箒や鈴も休むと言うので、残ったオルコットと共にアリーナへ向かう。

「オルコットも一夏に合わせて休むと思っていたが、意外だな」

「余り大勢で押しかけては迷惑ですわ。まあ、あの二人がいるので騒がしくなるような気がしますが……」

「さすがに空気ぐらい読めるだろう」

「だとよろしいのですが……」

あの調子ではすぐにボロを出して、明日にはシャルロットの秘密も明かされているかも知れんな。

義母が死んだ以上、デユノア社が浄化されるのも時間の問題だ。

隠すより明かした方が楽だと思うがね。

『ステンバーイ……ステンバーイ……ゴウ！』

アリーナにてオルコットを待っていると、八時の方向から銃弾が飛んできた。

ハイパーセンサーとシルバークローズを通じて狙われていることは分かっていたので、半身になることでそれを躲す。

『Dub……』

そこはカタカナじゃないんだな。

まあ俺を狙うのなら、下手に銃弾がブレないものよりも、ブレてバラけるタイプがおすすめだ。

接近してソードオフ・ショットガンを撃つとかね。

「男のくせに専用機なんて生意気なのよ」

「オルコットさんに勝てたのも機体のお陰なんですよ」

「さっさとその機体をこっちに渡しなさい」

アリーナでの訓練は今回が初めてではない。

だが今日に限って三人に絡まれるとはな。

知らない内に、一夏達が抑止力となっていたようだな。

織斑姉弟に頭が上がらない。

『なおフランスは爆破した模様』

バレなきや犯罪じゃないんだよ。

「無視してんじやないわよ！」

右にステップすることで三点バーストを躲す。

左前方、右前方へ、時にフェイントを混ぜ、連続して放たれる射撃を掻い潜りながら

接近していく。

「なんで、当たらないのよ！」

「こんなの絶対おかしいわ！」

フルオートで弾幕を晴れば少しは被弾しただろうがな。

バースト射撃の合間を縫うのは難しいが、出来ない訳じゃない。

ISには高水準かつ三次元的な機動力とPICによる慣性制御がある。求められるのはタイミングだけだ。

そうこうしていると二人揃って弾が切れたので、一気に距離を詰める。

するとラファールを纏った二人と違い、一人だけ打鉄を纏った女子生徒がブレードを手に前へ出てきた。

その機体を寄越せ、と喋っていた奴か。

横薙ぎを跳躍して飛び越え、右手で頭頂部を掴み、跳躍の勢いとPICを使って逆立ちとなる。

『上から来るぞ、気をつけろ！』

この状態から片側のスラストターを使って瞬間加速することで回転し、

首を振じ切る——はずだったが、シルバークローズからのお茶目な警告を受けて離脱する。

するとレーザーが通り過ぎていった。

上じゃなくて横かよ。

『サーセン』

このうっかりさんめ。

周囲を確認すると、どうやら狙撃したのはオルコットのようだ。

地上には日本刀を手にした千冬さんがいる。

残念、あと一步で仕留められたのだがね。

「三人は私と来い。　オルコット、鬼道を見張っておけ。　何かするようなら構わず撃て」

「了解ですわ……当たらないでしょうけど」

「牽制にはなる。　お前たちも命が惜しければおかしな真似はするなよ、口を閉じてろ」
あんな、なんか殺伐な空気。

千冬さんの後ろ歩く三人の顔色は優れない。

打鉄を纏っている生徒なんかは真っ青で分かりやすい。

ほぼ一瞬のような出来事だったが、あのあとの自分がどうなるかぐらいは理解出来ないようだな。

死んだことの無い人間が死を恐れるというのが、俺には理解出来ないけどな。

「有機さん、一つ聞いてもよろしいですか？」

銃口を向けながら質問とは、様式美が分かっているね。

「何をだ」

「もし私が撃たなかったら……あの生徒を、殺していたのですか？」

「もちろんだとも。」

もつとも、絶対防御が発動していたかも知れんがね」

「何故、殺そうとしたのです?」

「俺にとつて人を殺すというのは、毎週水曜日に週刊誌を立ち読みするようなものだ。別に理由なんてない。」

「読みたいと思つたら読むし、殺したいと思つたから殺すのだよ」

「答えになつていませんわ」

「では正当防衛と答えようか。」

「殺して無力化する、それが一番手っ取り早い」

「……とても、信じられませんわ。」

「何か弱味でも握られているのですか」

『弱味を握っている。主に体調管理で』

その点、シルバークローズには感謝している。

機械化された部位の調整は得意だが、生身の調整は苦手だな。

「本当のことを言つて信じて貰えないのなら、俺は本当のことを言うだろうな」

どうせ長く生きられないんだから、派手に生きたいものだ。

さて、千冬さんが帰ってくるまでまだ時間がある。

俺が動くとそれを追ってくるライフルの銃口を逆手に取つて、ゆっくり円を描くよう

に歩く。

撃つかと思ったが、やはり一夏と同じで手温いな。

箒や鈴なら容赦無く斬りかかって来そうなものだが。

オルコツトは黙り込んだまま、動く俺に銃口を合わせ続ける。

自分が緩やかに右回転していることも知らずに、回り続ける。

少しずつ、少しずつ歩く速度を上げていく。

何だか楽しくなって来たぞ！

「何をやってるんだか……」

千冬さんが来る頃には、高速ステップとフェイントで背後を取ろうとする俺と、

そうはさせじと偏差射撃やピット射撃による牽制を混ぜて応戦するオルコツトがいた。

途中から普通に訓練になってたわ。

いい汗掻いたぜ。

オルコツトも笑顔を浮かべている。

これがスポーツによる雑念の昇華というやつか。

一つ賢くなったな。

◇◇◇◇◇

学園側は俺の殺人未遂行為を無かったことにするらしい。

二人しかいない I S に乗れる男が殺人未遂となれば、いろいろ騒がしくなるからだろう。

既に何人が殺してるが、物的証拠が無い限り無意味だ。

日本は過ごしやすくていいね。

「カツ丼あります?」

「……………」は取調室ではない。

生徒指導室だ」

残念、憧れていたのに。

裏切られた気分だ。

千冬さんは俺の正面に座ると、疲れたように両肘を付いて手を組んだ。

「有機……………私には、お前が分からない。

お前は何者なんだ」

哲学かな?

まあそういう意味ではないだろうが。

「束さんから聞かされていいのですか?」

「……………人造人間ということは聞かされている。

だが詳しくは知らん。

気がつけば道場において、気がつけば道場から消え、そして気がつけば一夏と共にいた。私を知っているのはこれくらいだ」

「へえ、案外知られていないものですね。

テレビ局や企業を潰したことぐらいはバレていると思つていたのですが」

「そんなことをしていたのか？」

「くくく、まるで束のようだな」

「光栄なことです。

個人的に束さんのことめっちゃリスペクトしているので」

「そうか、お前は束に影響を受けてしまったのだな。

束と違つて無関心というよりは過激なようだが……とりあえずルールは守れ。

時に破る必要があつたとしても、公然と人を殺すのは避ける。

弟の友人を失いたくはない」

「言われなくとも、私は友人のつもりですよ。

向こうはどう思つているか分かりませんがね」

「一夏も友人だと思つているはずだ。

音楽プレイヤーを手放さないのがいい証拠だ」

「だと良いんですけどね」

一夏を善悪で判断するなら、間違はなく善だろう。

俺が無関係な人間を殺したと知れば、マツハで敵対するに違いない。

そして姉は一夏の味方。

想い人達も同様で、そこに妹がいる束さんも味方になるだろう。

束さんが敵となれば、シルバークローズが抑えられる可能性大だ。

あれ、もしかして俺一人……？

◇◇◇◇

反省文を書き終えて自室に戻る頃には、既に夕食の時間は過ぎていて、就寝まで一時間といったところだった。

まあかんざっしーはいつも遅くまで作業しているので、部屋は変わらず明るいままだ。

暇さえあれば演算や設計を繰り返すその姿は、対暗部の暗部組織当主である姉とは似ても似つかない。

本音曰く姉妹関係は不仲だと言うし、一夏のこと余り好きではないようだ。

白式が優先されたことで、自分の専用機が後回しにされているのが原因だったかな。

不運だね。

まあ映画やアニメを楽しんでるあたり、割と余裕なんじゃないかと思うが。代表辞めて整備士になった方が幸せかもね。

「おかえり」

「ただいま」

何気なく言葉を交わしたが、同室になったばかりの頃は無視されていたな。

これが慣れってやつか。

おや、今日はかんざつしーの制服にゴミが付いていないようだな。

残念だ。

付いてたら布仏の実家にドロイドを郵送してやろうと思っていたのに。

「専用機の方は順調かい？」

「うん、順調……もしかして皮肉で言ってる？」

「そんなつもりじゃないさ」

「うん、分かった。」

少しは慌ててくれるかなって思ったけどダメみたい」

「そういうのは俺以外とやってくれ。」

脳味噌の仕組みが違う」

「ちよつと興味があるかも」

「死体の解剖がお望みかい？」

「それはちよつと……」

冗談で言つたとはいえ、劣化が思つたより早い。

俺がクローンであればオリジナルの遺伝子を使つて再調整が出来たのだが。受精つてのは残酷だな。

名も顔も年も知らない両親が憎いぜ。

見つけたら脳だけにして何度も絶命体験させてやる。

脳細胞が劣化して崩れるその日までずっとな。

◇◇◇◇

俺は今、アリーナにいる。

時刻は早朝、まだ空が薄暗い時間帯。

対峙するのはどうみてもエネルギーパックをケチられて小さく育つた人造人間、ラウラ。

専用機、シュヴァルツエア・レーゲンを身に纏うと一層小さく見える。

どういふ交渉のしたのかは分からないが、無人かつこんな時間のアリーナの使用許可を得たらしい。

「健康的だな、こんな早朝から模擬戦とは」

「本来なら日課の訓練に当てている時間帯だ。

私にとっては早起きでも何でもない」

「皮肉で言ってるんだよ」

「……」

無言でカノン砲がこちらを向く。

審判はいない。

管制室は無人だ、警備員も眠らせてある。

砲弾が放たれると同時に模擬戦が始まるだろう。

だが、ラウラはそうしなかった。

「戦う前に、聞きたいことがある」

既視感のある顔だ。

真面目モードの織斑姉弟に類似している。

「貴様にとつて、ISとは何なのだ？」

「機械だな」

「……即答とはな。」

「それも兵器でもファクションでも無く、機械だと？」

「そうだ、機械だ。」

人が人の為に生み出した道具に過ぎん。だがまあ、これは少し冷たい言い方だな。

いくつか付け足すとしたら……そう、機械と生物の狭間に生きる俺にとつては友人のようなものだ。

兵士が小銃に愛着を抱くように、俺はISを受け入れる。

ただそれだけのことだ」

『相棒ですな』

まさしくその通り。

「……なるほど。」

やはり他の生徒とは違うな」

そう言つて、ラウラはカノン砲の砲身を下げた。

シュヴァルツェア・レーゲンの漆黒の手を、まるで握手をしようとしても言いたげに差し出してきた。

「何のつもりだ」

「貴様を遊ばせて置くなど愚策だ。

例えサイボーグだとしても構わん。

ドイツへ来い」

「ふふふ、広報活動とは、随分と職務に忠実じゃないか。

一夏への怒りで頭が一杯だと思っていたぞ」

「奴は必ず潰す。」

だが私の怒りとは別に、貴様には価値があるのだ！」

「真正面からそう言ってきたのはお前が初めてだぞ。」

中々好印象だが……答えはN oだ」

「生まれ故郷からは離れられないか」

「それは違うな。」

こんなクソみたいな島国に愛着などない。

便利ではあるがな」

「……ならば何故、ドイツを拒絶するのだ」

シルバークローズの腕を振るう。

掌に展開していた刃状の装甲が手裏剣のように投げ放たれ、ラウラはそれを手刀で弾いた。

弾かれた刃が制御コアからの電波を受けて、俺の手元へと戻り、再び装甲としての役割へと戻る。

「知りたければ俺を倒すことだ。」

実に青春的だろう?」

「——面白〜!」

◇◇◇◇

銃口を視界に捉えている限り、銃弾を避けるのは難しいことじゃない。

銃弾を掴みとるのは難しいが、出来なくはない。

切り払うのは比較的簡単だが、弾種によつては破裂したり跳弾して予期せぬダメージを負うことになる。

では砲弾はどうだろうか?

レールカノンという特性上、弾速は銃弾と比べ物にならない。

射線に立たなければ問題ないとはいえ、着弾時の爆風が厄介だ。

掴みとるのは難しい、というか無理だ。

運動エネルギーが銃弾とは比べ物にならない。

切り払うのも難しい。

ならばどうする?

「ぐっ、馬鹿な!」

答えはぶっ壊すだ。

なんてことはない。

連射される砲弾の中をステップとフェイントで潜り抜け、A I Cの有効範囲すれすれで加速。

A I Cが発動されるより速く刃状に変化させた腕部装甲でカノン砲を切り裂き、走り抜けたまでのこと。

本来なら単なる物理的な斬撃などシールドエネルギーに阻まれ、数値を減らすだけだ。

だが、刃部分に極小の刃群を形成し、それをチェンソーのように高速で動かすことでシールドエネルギーもろとも実体を斬り裂くことが出来る。

卓上の理論であったが、例外とやれば出来るものだ。

精密かつ並列動作が多く、斬り裂いた時に幾つかの刃がダメになるのが問題点だがな。

零式白夜が羨ましい。

『勝てばよかろうなのだ』

全くもってその通り。

さて、レールカノン砲は根本付近の機関部を損傷させたので、もう使い物にはならな
いだらう。

追撃と行こう。

言葉の、な。

「遅いな。」

「一夏なら反応出来たかも知れないぞ」

「黙れ！」

プラズマ手刀とワイヤーブレードが展開され、こちらへ向かって低空を飛翔してくる。

シルバークローズの右腕を左肩まで振りかぶり、体の捻りを加えて一気に振りぬく。

「無駄だ！」

五指から伸びた糸状の装甲がシユヴァルツエア・レーゲンを斬り裂く、と思いきや手前の方で糸が止まってしまう。

かなり細くしたはずだが、認識されてしまえばA I Cの前には無力か。

それに糸とはいえ装甲は装甲、本体と繋がっている。

糸を切り離す必要がある。

ブチっとな。

『ああジェニファー！ ローレン！ アニス！ ファットン！ レニー！』

こいつ糸一本一本に名前付けてやがった。

何に影響を受けてしまったのやら。

距離を取って戦ってもいいが、最終目標のことを考えるとチマチマしたことは避けるべきだ。

こちらでも装甲を変化させて擬似的なワイヤーブレードを展開し、迎え撃つ。

ワイヤーブレード同時がぶつかり合って弾かれ、絡み合い、本体へ向かってくるものは互いに切り払う。

距離が詰まればプラズマ手刀と腕部装甲刃がぶつかり合った。

僅かに刃が手刀に食い込むが、プラズマの影響が極小の刃群があつと言う間に破壊されてしまったようだ。

邪魔なワイヤーブレード擬きを切り離し、近接戦闘を開始する。

『エネルギー残量にお気をつけください』

近距離に置ける高速戦闘にシルバークローズは充分に応え、横から、後ろから、時上から斬撃のみならず蹴撃をラウラに浴びせていく。

A I Cを避けるため、正面には立たず、決して集中させない。

回避と同時に装甲刃を投擲し、攻めて攻めて攻めまくる。

A I Cで捉えるより早く攻撃を加え、翻弄するのだ。

「っ、おのれ！」

ラウラは防御に手一杯となり、悪態を吐いた。

「ハハハ！ もっとよく狙わなければ当たらんぞ！」

『貴様に足りないものそれは！』

情熱理念——』

cut.

まあこつちの加速用エネルギーも後僅かなので言うほど余裕はない。

加速の度に取り込むようではA I Cに捕まってしまうだろう。

そろそろ次の段階へ進むか。

新しい心臓を使ってもいいが、あれはI Sの出力とは関係がない。

使っても意味がないだろう。

今はお前が主役だ！

来い、ジエニフアー！

「っ、うあっ」

糸は音もなく、俺にラウラの首に巻き付いた。

シールドエネルギーは外部からの運動エネルギーに対しては効果的だが、衝撃や拘束時の締め付けなどには対応していない。

掴まれたり、拗じられたりすると本体が非常に危ないことになる。

それにしても、中々楽しませてくれる喘ぎ声だ。

思わず笑顔。

ラウラの首は細い。

『いいぞジェニファー！ そのままセリヌンティウスを絞め殺せ！』

セリヌンティウスに何の恨みがあるのやら。

まあ楽しそうなら構わん。

膝を付いて首を抑えるラウラの姿は、普段の強気な姿を知るだけに見ていて飽きない。

ISのパワーなら装甲が変化したものとはいえ、糸を振り解くのは簡単だ。

だが首を締められながらではそうもいかないようだ。

また一つ賢くなったな、鬼道有機。

『知力がアッブ！』

どれくらい上がったかを教えてほしいぜ。

まあ数値化されても面白くないのだが。

少し糸を緩めてやる。

「カハツ、はあ、はあ、ゲホツゲホツ！」

ラウラが苦しんでいる。

やはり人間だな。

人造人間の反応ではない。

俺のクローンは悲鳴など上げないし、それはN.O. 18とN.O. 7も同じ。

ドイツ軍と千冬さんには子育ての才能があるようだ。

ある程度呼吸を整えたラウラの目には、怒り以外に恐怖のようなものが浮かんでいった。

——頃合いだな。

「危ないところだった……君の奮闘を称え、先程の質問に答えてやろう」

「……」

心にもないことを、とでも言いたげな目だ。

俺も目に込められた感情を理解出来る程度には成長したらしい。

「それはな……お前がいるからさ」

「な、何？」

「お前は倫理から外れて生み出されたというのに、倫理を破ることを恐れている。

軍属であること、また教官役の千冬さんの影響だろうが、それでもお前は誰の許しが無くとも、倫理の枷を踏み越えて行ける存在だ。

だが、お前はそれを躊躇っている」

「私は私のやり方で自らの望みを叶える。」

法を犯す必要はない！」

「法とは他人の目と耳だ。」

お前はそれを恐れている。

他人とは違うはずなのに、他人と同じでいたいと思っっている」

「恐れてなどいない！」

私は私だ！」

「だが何度も迷っただろうか？」

躊躇しただろうか？」

「……っ」

「だが答えなど出なかったはずだ。」

そして答えてくれる人間も居なかったはずだ。

だから妥協をした」

「妥協、だと？」

「織斑千冬への依存がそうだ。」

自らではなく、お前は他者を主とすることで——楽をしている。

そんな妥協を繰り返して来たのが今のお前だ」

「違う！ ガッ」

シルバークローズの大きな手が、ラウラの首を掴んだ。

そのまま持ち上げれば、苦しみと怒り、そして焦りが顔に浮かんできた。拷問やSMプレイは趣味じゃないが、中々興味深いな。

「人として二流、人造人間としても二流。」

そんな人のような人でない者のいる国になど、誰が行くものか」

——失敗作め。

「違う、違う、違う！」

私は、私は、っ!？」

ラウラが狼狽した様子を見せる。

シュヴァルツェア・レーゲンから黒い泥のようなものが溢れだし、ラウラ諸共包み込んでいく。

「来たか」

ラウラを泥ごと投げ捨て、拡張領域から目的の武装を現出させる。

灰色の刀身に光沢は無い。

波紋も無い。

鏢も無い。

刀身と柄、ただそれだけだ。

「戦乙女の模造品、試し切りには相応しい相手だ」
形成されていく漆黒の戦乙女。

いや、暮桜だったか？

まあ些細なことだ。

大切なのは程よい大きさだ。

「喜べ、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

お前を悲劇のヒロインにしてやる」

生きていれば、な。

◇
◇
◇
◇